

## ザヒーラ考

後期マムルーク朝のスルターン財政

五十嵐 大介

(日本学術振興会特別研究員 [東洋文庫])

### A Study on *al-Dhakhīra* The Sultan's Finance during the Circassian Mamluk Period

IGARASHI, Daisuke

JSPS Research Fellow, The Toyo Bunko

Since the establishment of *Dīwān al-Amlāk* (the bureau of the Sultan's private real estates) by Barqūq, the first sultan of the Circassian Mamluks, the successive sultans, being independent of the state's purse, attempted to ensure their personal revenue sources, particularly in the form of agricultural land. *Al-Dhakhīra*, which originally meant "treasure" in Arabic, is a key technical term that was used to refer to the Sultan's finance during the Circassian Mamluk period; with time it has taken on new meanings. Through an investigation of *al-Dhakhīra*, this article described the structure and development of the Sultan's finance; it also discussed the background required it to play the crucial role in the state's financial administration.

The meaning of the term *al-Dhakhīra* changed from "treasure" to lands possessed by the Sultan himself, such as lands that were privately-owned, leased, *waqf* (religiously endowed), and lands under his *himāya* (private protection). It finally became the general term for various kinds of financial resources under the direct control of the Sultan. This transition in meaning was paralleled to the gradual increase in the Sultan's finances such as the increase in his privy purse, establishment of his private domains, the change in the character of the lands—from privately-held lands to an official revenue source belonging to the sultanate, and finally the diversity of the Sultan's financial resources. These major developments in the Sultan's finances occurred in the midst of the collapse of the traditional landholding system in the Mamluk state; that is, during this period, the alienation and privatization of state lands by powerful individuals radically unsettled the structure of the Mamluk state, which was based on the *iqṭā'* system and depended on land tax

---

**Keywords:** The Mamluk sultanate, Financial system, Land tenure system, Waqf, Commercial policy

キーワード： マムルーク朝，財政制度，土地制度，ワクフ，商業政策

\* 本稿は，平成 17，18 年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

revenues from the government domain. Therefore, like other powerful amirs who pursued their own interests, successive sultans encouraged the large-scale expansion of resources under their direct control through the diversion of state lands or the acquisition of once-alienated lands from the state treasury in order to cement their positions as well as to sustain the weakened state finances. Subsequently, *al-Dhakhira* became essential for the financial administration of the state. It could be said that the development of *al-Dhakhira* was part of a process by which the members of the ruling elite (including the Sultan) privatized state resources, and a means of maintaining the Mamluk regime weakened under the prevailing social situation wherein the privatization of state lands continued uninterrupted.

- |     |                             |    |                             |
|-----|-----------------------------|----|-----------------------------|
| I   | はじめに                        | 1. | スルターン直轄領の形成                 |
| II  | スルターン私財の形成と発展：ザヒーラの語意分析から   | 2. | ワクフとザヒーラ                    |
|     | 1. ザヒーラとは何か                 | 3. | 商業とザヒーラ                     |
|     | 2. 土地権益とザヒーラ：動産から「スルターン私領」へ | 4. | その他                         |
| III | スルターン私財とその運営                | V  | スルターン財政拡大の意味                |
|     | 1. 「スルターン私領」の構造             | 1. | 行財政運営におけるザヒーラの役割            |
|     | 2. スルターン私財担当官の変遷            | 2. | スルターン交代時のザヒーラ：権益の集積と流出のサイクル |
| IV  | スルターン直轄財源の確立                | VI | おわりに                        |

## I はじめに

前稿(五十嵐 2004b)で私は、チェルケス・マムルーク朝(784-922/1382-1517)初代スルターン、バルクーク al-Zāhir Barqūq(在位 784-91, 792-801/1382-89, 1390-99)が私財、特に農地を中心とした不動産を私有地やワクフ(waqf: 寄進。複数形はアウカーフ awqāf)として保有し、その運営を新設したアムラーク庁(Diwān al-Amlāk: 私有不動産庁)を軸として組織化したことを明らかにした。スルターンが国家財政から独立した自身の財産形成に努めることはそれ以前から見られたが、このような不動産を軸とした財源確保の手法は、特にバフリー・マムル

ク朝(648-784/1250-1382)末期から盛んになった。そしてバルクークによって組織化された「スルターン財政」は、以後の歴代スルターンたちのもと、拡大の一途を辿ることとなった。それは商業活動への介入や売官などを通じた財貨の獲得の他、農地・都市不動産の購入とそのワクフ化による恒常的な収入源の確保など、様々な施策・形態を通じて追求された。そして、大規模なワクフ設定と様々な財政政策の導入で知られるマムルーク朝末期の二大スルターン、カーイトバーイ al-Ashraf Qāytbāy(在位 872-901/1468-96)とガウリー al-Ashraf Qānshūh al-Ghawrī(在位 906-22/1501-16)のもとで、スルターン財政の規模は頂点に達したのである<sup>1)</sup>。

このようなスルターン財政の拡大が、チェ

1) 両スルターンの財政政策については、Petry 1994a: chap. 6, 7; 三浦 1989: 1-3, 12-19; Miura 2006: 158, 168-176.

ルケス時代を通じて深刻化した財政難の影響を受けたものであることは間違いない。しかしながら、これまでは「スルターン＝国家の長」という理念もあり、歴代スルターンのこのような施策は単純に「国家の財政政策」と見なされたように、国家財政とスルターン財政の区別は曖昧に捉えられ、この分離が示す意味は見落とされてきた。しかし、スルターンの経済基盤の独立と発展は、財政難とその対応という次元に止まらず、スルターン権力や政治構造、さらには国家体制そのもののあり方とも密接に関係する問題である。一方、この時代の財政難は、経済的衰退のみに原因を求め得る現象ではなく、より本質的には土地制度上の問題が背景にあった。すなわち、バフリー末期より進行した、国有地 (amlāk bayt al-māl) の私有化・ワクフ化に代表される国家による土地徴税権の一元的掌握と管理能力の低下が、イクター制と政府直轄地収入に依拠した既存の行財政システムを根底から動揺させていたのである<sup>2)</sup>。このような当時の社会的状況を踏まえた上で、スルターン財政の独立と拡大の意味を、より広くマムルーク朝国家体制の構造的変化という視点から探っていく必要がある。

さて、この時代のスルターン財政を見ていくにあたって史料中に表れる重要なキーワードが、「ザヒーラ (al-Dhakhīra)」である。この語は本来「獲得されたもの」転じて「財宝、蓄え」という意味を持つアラビア語であり<sup>3)</sup>、個人の秘匿された財貨を指す一般名詞として用いられていたものの、チェルケス期にはスルターン財政と関連する特殊な用語となり、かつ時代とともに意味内容が変化していった。しかし、これまでこの語は特にテクニカルタームとして認識されてこなかったた

め、その語意およびその変遷がもつ意味は明らかでない。スルターン財政の問題に取り組むには、まずはこの語の意味を明らかにしていくことが不可欠であると考ええる。

以上のような問題意識のもと、本稿ではこのザヒーラという用語を手掛りとして、チェルケス・マムルーク朝におけるスルターン財政のあり方と展開、およびこれが必要とされた背景とそれが果たした役割について考察する。それによって、チェルケス期を通じて進行した国家財政の困窮・再編と最終的な破綻、およびスルターン財政の拡大と発展は、有機的に関連した一連の現象であり、それはこの時代を通じた土地制度の変動と、有力者による私的権益集積の進行と深く結びついていることを明らかにする。その上で、マムルーク朝国家体制の歴史的展開を俯瞰する、全体的な見通しを提示したい。

## II スルターン私財の形成と発展： ザヒーラの語意分析から

### 1. ザヒーラとは何か

まず最初に、本稿で考察するザヒーラが、先行研究や史料中でどのような意味で扱われているか整理する。前述のように、これまでこの語をテクニカルタームと見なして具体的に検討した研究はない。ただし、このザヒーラの名を冠した財務官の存在は知られており、漠然とスルターン個人の財物 (treasure) を監督していたと考えられてきた<sup>4)</sup>。それに対しポリアク Poliak の研究では、保有者のいない欠員イクターを管理していたのが「ザヒーラ庁 (Dīwān al-Dhakhīra)」であったとされる<sup>5)</sup>。一方ナーシール Nāṣir は、このディーワーンは直接スルターンにあてがわれ、その収入が彼の個人的裁量によって費や

2) Abū Ghāzi 2000; Sabra 2004; 五十嵐 2006: 序論, 第1部第2章; id. 2004a.

3) Ibn Manẓūr, *Lisān al-ʿArab*, 4: 302-303; al-Firūzābādī, *al-Qāmūs al-Muḥīṭ*, 2: 34; Lane 1863-93, 3: 956.

4) Popper 1955-57, 1: 93, 98; Martel-Thoumian 1992: 54; Amin 1980: 119-121; Sabra 2000: 72.

5) Poliak 1939: 22.

された、スルターン専用のイクターを管理していたと見る<sup>6)</sup>。また他にも、ヴェネチアーマムルーク朝間の香辛料貿易を扱った研究では、ヴェネチアに残存する貿易協定文書に表れる「dacchieri」というマムルーク朝側の商業担当機関が、アラビア語のザヒーラに比定されている<sup>7)</sup>。

一方、マムルーク朝時代の行政便覧的な史料によれば、*Masālik* や *Ṣubḥ* にはザヒーラ関連の職務についての記述はなく、これらが対象としているバフリー期からチェルケス初期には、具体的な組織や官職としては未確立であったことを示唆する。それより後の時代、ジャクマク al-Zāhir Jaqmaq の治世 (842-57/1438-53) 初期の 846/1442 年に執筆された *Ḥubda* には、ザヒーラ庁の存在が確認できる。しかしその記述は、「これは最も重要なディーワーンの一つであり、多くの収入源 (jihāt) からザヒーラの財貨 (amwāl al-dhakhīra) を集める。これには一人の監督官 (nāzir) と複数の官吏たち (mubāshirūn) がいる」との説明にとどまり<sup>8)</sup>、具体的なことは全く不明である。

それに対して、その前のスルターン、バルスバーイ al-Ashraf Barsbāy 期 (825-42/1422-38) 頃に書かれたとされる *Dīwān al-Inshā'* には、このザヒーラについて唯一、以下のように具体的な説明がなされている：

「アムラーク・ザヒーラ監督官職 (nazar al-amlāk wa-al-dhakhīra)。これら二つは相互に結びついた収入源である (humā jihātāni mutaḡāranatāni)。アムラークとは農地 (ḡiyā') と住宅 (ribā') とそれに関係する、君主もしくはその親族 (aqārib-

hu) のために購入されたものであり、ザヒーラとは、地区 (nawāḡi)<sup>9)</sup> や農地 (mazāri'), 水車 (dawālib) その他のうち、君主のために賃借されたものである。この職の就任者は、君主のために購入されたもの、そこから売られたもの、彼のために賃借されたもの、賃借したものといたかかる諸収入源を管轄する。彼は支出するものを支出し、[収入として] 運ばれたものを金庫 (al-khazā'in) に運ぶ担当者 (mutaṡarrif) である。時にはこの職を剣の人 (dhū sayf : 軍人) が務める。」<sup>10)</sup>

このように、*Dīwān al-Inshā'* によれば、アムラークが「スルターンの私有不動産」であるのに対して、ザヒーラとは「スルターンの賃借地」を指したという。

以上のようにザヒーラの語意をめぐっては、先行研究や史料によって全く異なる解釈が並存している。しかし結論から言えば、これらの説はいずれも正しい。チェルケス時代を通じたスルターン財政の展開に伴い、ザヒーラという語も新たな意味を加え、時代ごとに語意が変化していったのである。それについては本稿での議論を通じて示していくが、まずは出発点として、この語が年代記中に頻繁に見られるようになり、スルターンの私財と深く関係するようになった、8/14 世紀後半のバフリー末期からチェルケス初期の用例について整理してみよう<sup>11)</sup>。

ザヒーラは複数形 (dhakhā'ir) とともに、バフリー末期から年代記中に頻出するが、ここでは本来の語義通り、財宝や蓄えを指す一般名詞として用いられている。ただし、この時期にスルターンやアミールが各々私財の獲得に努め、10/16 世紀初頭のマムルーク朝滅

6) Nāṡir 2003: 116-117.

7) 古林 1968: 54; Wansbrough 1961: 206, 211, note 7; id. 1963: 528, note 3.

8) al-Zāhirī, *Ḥubda*, 110. 執筆年については、菊池 1997: 61.

9) 単数型は nāḡiya. エジプトの土地の収入高、面積が算出された単位で、行政村にあたる。

10) *Dīwān al-Inshā'*, fol. 137v. なおこの史料については、Martel-Thoumian 1992: 16.

11) 以下の内容は五十嵐 2004b: 23-24; id. 2006: 75-80 で既に論じたが、ここでも概略を述べておく。

亡まで続く国有地その他国家に属する各種権益の流出と私有化の端緒となったことから<sup>12)</sup>、特に有力者が保有し、時には秘匿していた金銀財宝その他奢侈品といった私的な動産の蓄えを指す例が多い<sup>13)</sup>。一方で農地・住宅などの私有不動産は「アムラーク」の語が用いられ、同じ私財であっても明確に区別されている<sup>14)</sup>。その中で、特にスルターンのザヒーラに目を向ければ、シャーバーン2世 al-Ashraf Sha‘bān (在位 764-78/1363-77) 治下の 775/1374 年に「ザヒーラ監督官 (nāzir al-dhakhīra)」職が史料中に初めて表れる<sup>15)</sup>。彼は自身と一族の土地保有を促進するなど、私財の獲得に努めたことで知られ、この職の出現はその規模の拡大を示すものと言えよう。その後 784/1382 年に即位したバルクークは、私有地の獲得とそのワクフ化を通じて私財を拡張するとともに、その管理運営のための機構を整備した。797/1395 年に彼の私有地を管理するアムラーク庁が新設されたのに続き、799/1397 年には「アムラーク・アウカーフ・ザヒーラ庁長官 (ustādār al-amlāk wa-al-awqāf wa-al-dhakhīra)」が任命され、彼の私有の動産・不動産およびワクフ財が「スルターン私財」として一元的に管理運営されるようになった。そして宦官のサンダル Şandal al-Manjakī が「ザヒーラの金庫係 (khāzindār al-dhakhīra)」として、こうして集められた財貨の保管と出納を担ったのである<sup>16)</sup>。

以上の事例から、バフリー末期からチェルケス初期にかけては、ザヒーラは有力者、特にスルターン私有の動産の意味で用いられて

いることが本来の語義からも史料上の用法からも明らかである。それに対し、先に見た *Dīwān al-Inshā’* によれば、バルスバーイ期頃までにはこれが「スルターンの賃借地」を指すようになったという。それでは、かかる語意の変化がどのような経緯で起こったのか、土地制度の問題を視野に入れながら検討してみよう。

## 2. 土地権益とザヒーラ：動産から「スルターン私領」へ

バフリー末期以降、国家がハラージュを徴収する政府直轄地が、有力アミールによって安価で賃借されるようになり、財政難の原因として問題視された。このような「賃借地 (musta‘jarāt)」は有力者の持つ利権の一つとして史料中に頻繁に表れる。例えばバフリー末期に事実上の統治者の地位にあったアターベク (atābak al-‘asākīr : 総司令)・シャイフ (ーン) Shaykhū(n) al-Nāşiri (d. 758/1357) は、彼がエジプト・シリアの各地に保有したイクターと私有地と賃借地から、毎日 20 万ディルハム (dh) 以上の収入があったと言われる<sup>17)</sup>。このような直轄地賃借の広まりは、スルターン権力の弱体化やペストの蔓延による農村への被害とイクター制への打撃といった、バフリー末期の不安定な政治的・経済的状況を主因としたものであったが<sup>18)</sup>、それが有力者の私財確保の手段として広く行われていた当時の状況を考えれば、もともとアミールの一員であったスルターンが他のアミールたちと同様に、当時流行していた「賃借」によって土地を保持し

12) Sabra 2004: 207-208. cf. 五十嵐 2006: 60-61.

13) al-Maqrīzī, *Sulūk*, 3: 354, 386; Ibn Qāḍī Shuhba, *Tā’rikh*, 1: 26.

14) Cf. 川本 1991: 66.

15) al-Maqrīzī, *Sulūk*, 3: 229.

16) 797/1395 年 : al-Maqrīzī, *Sulūk*, 3: 834; Ibn al-Furāt, *Duwal*, 9: 406; Ibn Qāḍī Shuhba, *Tā’rikh*, 1: 549. 799/1397 年 : *Duwal*, 9: 464; *Tā’rikh*, 1: 616. ザヒーラの金庫係 : *Duwal*, 9: 128, 429; *Tā’rikh*, 4: 48.

17) al-Şafadī, *A’yān al-‘Asr*, 2: 535; Ibn Taghrībirdī, *Manhal*, 6: 260.

18) 五十嵐 2006: 40-43; id. 2004a: 4-7.

図表 1-1—スルターン私財担当官職名表記の比較

番号	就任日付	人名	ustādār/nāzir	Ibn al-Furāt (d. 807)	Ibn Ḥijjī (d. 816)	al-Maqrīzī (d. 845)
1	799/8/16	'Alā' al-Dīn 'Alī b. al-Ṭablāwī	U	A/W/D [9: 464]		A/W [3: 878]
2	800/1/2	Faraj al-Ḥalabī	U		A/M [244]	A/D [3: 928]
3	801/5/2	Zayn al-Dīn 'Abd al-Raḥmān b. al-Kuwayz	N			
4	801/7/22	Nāṣir al-Dīn Muḥammad b. Sunqur	U		D/M [892]	A/W/D [3: 930] D/A [3: 1007]
5	801/9/29	Tāj al-Dīn b. Samakh	N			
6	807/12	'Alā al-Dīn al-Baghdādī	U			
7	812/5 816/7	Taqī al-Dīn 'Abd al-Waḥḥāb b. Abī Shākīr	U			A/W [4: 110] D/A [4: 268]
8	(841)	Nāṣir al-Dīn Muḥammad b. Ḥasan al-Fāqūsī	N			
9	844/8/7	Zayn al-Dīn 'Abd al-Raḥmān b. al-Kuwayz	U			D [4: 1220]

A: Amlāk/D: Dhakhīra/H: Ḥimāyāt/M: Musta'jarāt/W: Awqāf

※出典は特に指定がない場合は以下の通り：Ibn al-Furāt: *Duwal*; Ibn Ḥijjī, *Tā'rikh*, al-Maqrīzī: *Sulūk*; Ibn Qāḍī

ていたことは不思議ではない。事実、バルクークはアミール時代も即位後も賃借地を持っていた形跡がある<sup>19)</sup>。またその息子のスルターン・ファラジュ al-Nāṣir Faraj (在位 801-8, 808-15/1399-1405, 1405-12) も、「アミールたちと同様に」彼の賃借地と、同じく土地に関係する権益である後述のヒマーヤ (ḥimāya : 保護) による収入を管轄するためのディーワーンを置いていた<sup>20)</sup>。

それでは、ザヒーラがこのような「スルターンの賃借地」を指すようになったとするならば、それはどのような経緯によるのだろうか。ザヒーラが土地を示していることが明確な最初の事例は、バルクーク治世末期の 799/1397 年に行われた土地測量に関する以下の記事である：

「799 年ジュマードー I 月 2 日 (1397 年 2 月 1 日)、スルターン (バルクーク) は収税長官 (shādd al-dawāwīn) のアミール・フサイン Ḥusām al-Dīn Ḥusayn al-Gharsī に、上エジプトへの出立と、[同地における] 国家の土地 (bilād al-dawla al-sharīfa) と私有地 (al-amlāk) とザヒーラ (al-dhakhīra) [の土地] の測量 (misāḥa) を命じた。」<sup>21)</sup>

この記事におけるザヒーラが、この時代に一般的なスルターンの動産の意味ではなく、土地の範疇に属することは明らかであるが、それが具体的に何を指しているかは明確でない。ここでの「私有地」がバルクークの私有地を指していると考えれば、この測量が上エ

19) al-Maqrīzī, *Sulūk*, 3: 402, 858-859; Ibn Qāḍī Shuhba, *Tā'rikh*, 1: 580, 621; Ibn al-Furāt, *Duwal*, 9: 438.

20) al-Maqrīzī, *Khīṭat*, 1: 299.

21) Ibn al-Furāt, *Duwal*, 9: 461.

Ibn Qāḍī Shuhba (d. 851)	Ibn Ḥajar (d. 852)	al-‘Aynī (d. 855)	Ibn Taghribirdī (d. 874)	al-Ṣayrafī (d. 900)	al-Sakhāwī (d. 902)
A/W/D [1: 616] al-Khāṣṣ [4: 129]	D/A [1: 528; 2: 172] al-Khāṣṣ al-Sulṭānī [Dhayl, 105]	D [‘Iqd <sup>3</sup> , 412]		D [1: 448]	khāṣṣ li-al-sulṭān/ D/A [5:252]
A/M [1: 621] A/D [1: 646-7; 4: 14, 233]		A/D [‘Iqd <sup>3</sup> , 440, 485]	D/A [12: 98; 13: 22]	A/D [1: 457, 486]	A/D [4: 170]
		A/D [‘Iqd <sup>3</sup> , 484]		A/D [1: 485]	
A/W/D [4: 15]	A [2: 44]	D/A [‘Iqd <sup>3</sup> , 493]	D/A [12: 99]	D/A [1: 487; 2: 49] D [2: 98]	ustādār [7: 263]
		A/D [‘Iqd <sup>3</sup> , 487]		A/D [1: 490]	
D/A [4: 416]					
	A/D [2: 432] D [3: 10] A/D/M/W [3: 110] A/D [Dhayl, 249]	D [‘Iqd <sup>1</sup> , 168] A/D/M/W [‘Iqd <sup>1</sup> , 278]	A/W [13: 96]	D/A [2: 255]	A/D/M/W [5: 102-3]
	al-Khāṣṣ bi-Khāṣṣ al- Sulṭān/M/D [4: 85]				al-Khāṣṣ bi-Khāṣṣ al- Sulṭān/M/D [7: 222]
		D/H [‘Iqd <sup>2</sup> , 562-3]	D [15: 345]	D/A/H [4: 209]	D/A [Tibr: 45] D [3: 82]

Shunhba: *Tā’rikh*; Ibn Ḥajar: *Inbā’ al-Ghumr*; Ibn Taghribirdī, *Nujūm*; al-Ṣayrafī: *Nuzha*; al-Sakhāwī: *Ḍaw’*

ジプトにおける政府財源の直轄地とバルクーク個人の保有地との区分けを明確にするためのものと解釈でき、この記事中のザヒーラが「私有地」と対比されるバルクークの「賃借地」を意味していた可能性はある。一方それが広く私有地全般を指していると考えられるならば、この記事は国家の土地、民間の土地、バルクークの土地の三者の区分けを明確にするものであったと解釈でき、スルターンの私財と関係するタームであるザヒーラが、バルクークの保有地（私有地・賃借地問わず）の総称として用いられていると思われる。しかしこの記事だけでは判断することはできない。

ただし、既にこの時からザヒーラがスルターンの賃借地を指した可能性があったとして、常にそのような意味であった訳ではなかった。799/1397年に初代のアムラーク・アウカーフ・ザヒーラ庁長官に就任したイブン・アッタブラーウィー ‘Alā’ al-Dīn ‘Alī b. al-Ṭablāwī 以後、ジャクマク治世初期の

844/1441年までに同庁の長官 (ustādār) もしくは監督官 (nāzīr : 次官) に就いた人物と、その職名の史料上での表記についてまとめたのが (図表 I-1) である。ここで参照した史料の著者の内ほぼ同時代人と言えるのが、イブン・アルフラート Ibn al-Furāt, イブン・ヒッジー Ibn Hījī, マクリーズィー al-Maqrīzī, イブン・カーディー・シュフバ Ibn Qāḍī Shuhba, イブン・ハジャール Ibn Ḥajar al-‘Asqalānī, アイニー al-‘Aynī の6名であるが、一見して明らかのように、同じ人物の肩書きが彼らの間でも異同があるのみならず、著者を同じくする史料、また同じ史料の中においてすら、この官職の名称は必ずしも一定したものではない。この官職はザヒーラの他、「アムラーク」「アウカーフ」「賃借地」「ヒマーヤ」という、スルターンが様々な形態で保有した、土地と関連する諸権益のいくつかが並記されるか、もしくはその内の一つを冠した官職名で表記される。また

図表 I-2—スルターン私財担当官職名比較一覧

	Dhakhīra	Amlāk	Awqāf	Musta'jarāt	Ḥimāyāt	Khāṣṣ	言及なし	事例数
1	○	○						27
2	○							8
3	○	○	○					4
4	○	○	○	○				3
5		○	○					3
6	○			○		○		2
7		○		○				2
8						○		2
9	○	○				○		1
10	○	○			○			1
11	○				○			1
12	○			○				1
13		○						1
14							○	1

単純に「スルターンの私的財務官 (ustādār al-khāṣṣ al-sultānī)」等の名称で呼ばれる場合もあった。初代のイブン・アッタブラーウィーを例に取れば、イブン・アルフラートが彼の職名に「アムラーク」「アウカーフ」「ザヒーラ」の三者の名を冠しているのに対し、マクリーズィーは「アムラーク」と「アウカーフ」、イブン・ハジャルは「アムラーク」と「ザヒーラ」、アイニーは「ザヒーラ」のみを冠して記述している。

以上の6名に加え、より後代の歴史家であるイブン・タグリービルディー Ibn Taghribirdī, サイラフィー al-Ṣayrafī, サハーウィー al-Sakhāwī による表記も併せ<sup>22)</sup>、この職に言及される場合にこれらの権益のいずれが選択され職名に冠されるのか、そのパターンと頻度についてまとめたのが(図表 I-2)である(表記の違いによる混乱を避けるため、以下この職をスルターンの「私財担当官」と呼ぶ)。この私財担当官は、時に「スルターンのアムラーク・ザヒーラ・賃借地・アウカーフ庁長官」と呼ばれるなど、「ザヒー

ラ」と「賃借地」の並記例があることを見ると(No. 4, 6, 12), ザヒーラが常に「賃借地」という限定された意味であったとは言えないだろう。

ところで(図表 I-2)を見ると、この私財担当官に言及される場合「アムラーク」と「ザヒーラ」の二つのみが並記され、職名に冠せられる例が最も多く(No. 1/57 例中 27 例)、「ザヒーラ」単独がそれに次ぐ(No. 2/8 例)。またこれらの内一つの権益のみが冠せられている場合はほとんどザヒーラが選ばれている(9 例中 8 例)。その一方で、この職名でザヒーラに言及されない例は少なく、57 例中 9 例のみに過ぎない(No. 5, 7, 8, 13, 14)。こうした傾向は総じて後代の歴史書および後代の任命例の方が顕著であり、また複数の権益が列挙される場合でも「ザヒーラ」を最初に置く傾向が強くなる(図表 I-1, No. 9 など)。これらの用例から、スルターンの私財担当官のもと多様な資産が一元的に管理される中で、「ザヒーラ」が本来の財宝(動産)の意味を離れ、次第にこれらの

22) これら後代の史書は特に、先に挙げた同時代史料の記述をそのまま引用している可能性も想定されるが(例えば al-Sakhāwī と Ibn Hajar の表記の類似性)、それでも独自の表記もあり(No. 9 など)、著者の時代の同職名に対する認識をある程度反映していると考えられる。

図表 II—各スルターンの私有／ワクフ物件比較（括弧内は総物件数に占める割合（％））

スルターン名	エジプト				シリア				総計			
	農地	都市 不動産	その他	合計	農地	都市 不動産	その他	合計	農地	都市 不動産	その他	合計
バルクーク	3(9.1)	17(51.5)	3(9.1)	23(69.7)	7(21.2)	3(9.1)	0	10(30.3)	10(30.3)	20(60.6)	3(9.1)	33
シャイフ	14(32.6)	12(27.9)	3(7.0)	29(67.4)	7(16.3)	6(14.0)	1(2.3)	14(32.6)	21(48.8)	18(41.9)	4(9.3)	43
バルスパーイ	39(48.1)	33(40.7)	0	72(88.9)	2(2.5)	7(8.6)	0	9(11.1)	41(50.6)	40(49.4)	0	81

スルターン私財、特にその主要な収入源である、様々な手段・形態で保有された土地—以下ではこれを総称して、仮に「スルターン私領」と呼ぶ—を代表するタームとして認識されるようになったと考えられるのではないだろうか。そして前述のようにバルスパーイの時代、ザヒーラが特にスルターンの賃借地を意味すると見なされたことは、スルターンが国有地を「賃借」の名目で自身の個人的な収入源に転用することが進み、それがスルターン私領の中でも大きな割合を占めるに至ったことを仄めかす。それについては以下で「スルターン私領」を構成した各種の農地について個別に見ていく中で改めて論じる。

### III スルターン私財とその運営

#### 1. 「スルターン私領」の構造

##### (1) 私所有地とワクフ

バルクークが自身のために私有財やワクフとして多数の不動産を保有していたことは前稿で見たが、それは彼以後のスルターンにとって一般的な手法となった。文書史料をもとに、チェルケス時代前半の三人の有力スルターン、バルクーク、シャイフ al-Mu'ayyad Shaykh（在位 815-24/1412-21）、バルスパーイの各々がワクフもしくは私有財として保有していた物件を比較したのが（図表 II）である<sup>23)</sup>。これが全てであったとは限らないが、文書によればシャイフは43件、バルスパーイは81件と、その保有物件数はバルクー

クの例（33件）よりもさらに増加している。彼らはいずれもエジプト・シリアの広範な地域に、農地、都市不動産、その他農村の水利施設等を保有しているが、特に農地の占める割合が後のスルターンほど高くなっていることが一目瞭然である（30.3→48.8→50.6%）。特にエジプトの農地は、バルクークの場合はわずかに過ぎなかったが（3件、9.1%）、バルスパーイの事例では全体の約半数を占めるまでになった（39件、48.1%）。バルスパーイが827年ジュマダー II 月16日/1424年5月16日の最初のワクフ設定以来、死の前年841/1438年までの間に22度にわたって次々と物件を加えていき、かつ新たな支出用途を加えることはほとんどなかったことは、余剰収益を管財人＝バルスパーイ自身に自由に運用できたことを考えれば、これがワクフという形態をとった個人財産の集積に他ならないと言えよう<sup>24)</sup>。

これらの物件の中には、彼らがアミール時代に獲得したもの、また正規の取引によって他者から購入したものも含まれていたであろう。しかし彼らがこれだけ大規模な資産を獲得するには、スルターンとしての地位が大きな役割を果たしていた。すなわち、前稿で見たように、バルクークはスルターンとしての地位を利用して国有地（政府直轄地やイクター）を自身の私有地に転用したり、それをワクフに設定することを行ったが、ワクフ物件中に農地の占める割合がシャイフ、バルスパーイと右肩上がりに上昇していることは、

23) バルクークの保有物件は私有財とワクフ財が含まれているが（cf. 五十嵐 2006: 第2部第3章；id. 2004b）、シャイフとバルスパーイの保有物件は全てワクフに設定されたものである。

24) Waqf Deed, Sultan al-Ashraf Barsbāy による。cf. Amin 1980: 78-79.

こうした国有地の流用がさらに進んだことを示している<sup>25)</sup>。バルスバーイの治世 835 年ラビー II 月/1431 年 12 月に、こうした手法が初めて公に問題とされたことは、その表れと言える。この時、バルスバーイが自ら任命する国庫代理人 (wakil bayt al-māl) を通じて国有地を購入し、ワクフに設定するという手法に対して、一部のウラマーからその合法性に関して異議が唱えられた。このことは、バルスバーイによるワクフを手段とした国有地の「私財化」が、文書が示しているように、それまでのスルターンと比べてもより大規模であり、イスラーム的な慈善としてワクフ制度を擁護する立場にあり、またそれを生活の糧としていたウラマーにとっても目に余る規模であったことを示している。しかしこの異議は結局却下され、こうした手法によるスルターンのワクフの合法性は承認された<sup>26)</sup>。スルターンによるワクフを利用した資産の確保はこれ以降も継続され、前述のカーイトバーイとガウリーによって、それは極限に達することとなるのである<sup>27)</sup>。

## (2) 賃借地

政府直轄地を賃借によって獲得することは、前述のようにバフリー末期よりアミー

ルのみならず、文官も含めた国家の有力者たちに共通して行われるようになった手法であり、スルターンのそれもその性格において大きな違いはない。こうした賃借地が各地にあったことは無論であるが、特にシリアに大規模な「スルターンの賃借地 (al-musta'jarāt al-sultāniya)」が存在したことが史料から確認できる。肥沃な農耕地帯であるガウル al-Ghawr 地方はチェルケス時代初期からスルターンの賃借地であったとされ<sup>28)</sup>、また 824/1421 年には「シリアのスルターンの賃借地の監督官 (nāzir al-musta'jarāt al-sultāniya bi-al-Shām)」職の任免例が見られる<sup>29)</sup>。

マムルーク朝期のシリアはダマスクス、アレppoなど 6~7 の州に分割され、各州は総督 (nā'ib al-salṭana) のもと、エジプトの政府機構を模した州政府によって運営されていた。シリア各州の財務行政は基本的に独立採算制であり、余剰分が州総督によってカイロに輸送されることもあったが、エジプトとシリアの財務機構には直接の結びつきはなく、各州の税収が恒常的に中央政府のもとに送られるような中央集権的な財政の仕組みを持たなかった<sup>30)</sup>。このような財政制度を踏まえ

25) 五十嵐 2006: 82-83; id. 2004b: 29-30. これ以外にも、シャイフは一地区を自身の食料供給源に転用し、特別の財務官を設置していた。al-Maqrīzī, *Sulūk*, 4: 513.

26) Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Inbā' al-Ghumr*, 3: 477-479. 五十嵐 2007a: 032-035. 国有地のワクフ化は、それが政府のハラージュ収入の減少とイクター地の縮小につながることから、歴代スルターンによってしばしばその解消が努力されたものの、多くの場合ウラマーの強硬な反対により頓挫した (五十嵐 2006: 41-44; id. 2004a: 6-8)。スルターン自身によるワクフ設定を通じた私財の確保は、ワクフに対するこのようなウラマーの態度を逆に利用したともいえよう。なおマムルーク朝期における国有地ワクフの合法性をめぐる議論については、五十嵐 2006: 第 4 部第 8, 9 章; id. 2007a; id. 2003 を参照。

27) ベトリーはワクフ文書をもとに、両者のワクフ物件からの総収入と、マドラサなどのワクフ対象に割り当てられている支出高の概算を算出した。彼によれば、いずれのワクフもその支出先が規定されている割合は、総収入の 7~14% 程度であり、残りはすべて管財人を務めるワクフ設定者=スルターン自身の裁量に任される、個人的な資金となった (Petry 1994a: 199-200, 202-203)。

28) al-Qalqashandī, *Ṣubḥ*, 4: 190. なおガウル地方に専門の財務官や文官がしばしば任じられていることは、このためだと思われる [Ibn Qāḍī Shuhba, *Tā'rikh*, 1: 268, 462, 603, 608; 4: 150, 266; al-Maqrīzī, *Sulūk*, 4: 1008; al-Ṣayrafī, *Nuzha*, 3: 390; Ibn Taghribirdī, *Ḥawāḍith*<sup>2</sup>, 1: 224]。

29) Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Inbā' al-Ghumr*, 3: 249-50. またバルクークも、自身の賃借地と後述の商業担当機関、マトジャル (matjar) を管轄する人間をダマスクスに置いている。Ibn al-Furāt, *Duwal*, 9: 438; al-Maqrīzī, *Sulūk*, 3: 858-859; Ibn Qāḍī Shuhba, *Tā'rikh*, 1: 580.

30) 五十嵐 2006: 200-201; id. 1999: 035. マムルーク朝期のシリア地方行政については、Popper 1955-57, 1: 103-110; Ziadeh 1953: 11-38.

ば、シリアにあるこれら「スルターンの賃借地」は、元々は州政府にハラージュ収入をもたらす、シリアの各州政府の直轄地であったことがわかる。そしてスルターンがシリアの土地を選んで「賃借」したことは、当時のエジプトの財政状況とも関係していた。すなわち、バルクーク以後の財政制度の改編により、エジプトの政府直轄地の大部分が、スルターンのマムルーク軍団 (al-mamālik al-sultāniya) への俸禄支弁を任務とするムフラド庁 (al-Diwān al-Mufrad: 独立官庁) の収入源になった。チェルケス時代を通じた国家の慢性的な財政難の中、マムルーク軍団への月給はしばしば滞り、暴動の引き金となったことから、この官庁の維持はスルターンにとって政権基盤を安定させる上で最大の関心事となった<sup>31)</sup>。このため、もしもスルターンがエジプトにおいて大規模な「賃借地」を獲得した場合は、当然のこととしてムフラド庁へと皺寄せがいき、その収入不足をさらに悪化させることにつながる。このためスルターンは、農地を「賃借」によって自身の直接の収入源とするにあたり、国家にとってより重要性の低いシリアの土地を優先して選択したものと考えられよう。

ところで、ザヒーラをスルターン賃借地と説明した *Diwān al-Inshā'* はバルスパーイ期頃に執筆されたものであり、それは前述のように、スルターンによる国有地の購入とワクフ化が問題視された時期でもあった。この史料でザヒーラがスルターン賃借地を意味するとされたのは、スルターンのかかる手法が問題視される中で、「所有権」の直接の移動を伴わない賃借の方が合法性の面で障壁が低

く、それを通じて獲得された農地が「スルターン私領」の中で最も大きな割合を占めるに至ったことを示唆するのではないだろうか。そしてそれは、後述するように、これらの土地がその後「スルターン直轄領」へと発展する遠因となったと思われる。ただし、「賃借地」にしる「私有地」にしる、それは獲得のための法的な名目を出るものではなく、スルターンが実際にそれに適した賃料や代価をエジプトなりシリアの財務官庁に支払っていたかは疑わしい<sup>32)</sup>。

### (3) ヒマーヤ

チェルケス時代に特徴的な、土地制度と関連する重要な権益としてヒマーヤがあるが、スルターンの私財担当官はそのヒマーヤも併せて管轄していた<sup>33)</sup>。ヒマーヤとは、有力者が地方農村に行使した私的な保護権であり、その村を政府の地方長官 (wālī, kāshif) の「搾取」から保護する見返りに農民やムクターから保護料を徴収した<sup>34)</sup>。このヒマーヤはチェルケス時代を通じ、賃借地と並んでアミールその他の有力者が持つ私的権益の柱であったが<sup>35)</sup>、特にシャイフの治世以降に格段に広まったとされる<sup>36)</sup>。国家の財政難が恒常化し、その対応に苦慮していたスルターンが、一方で特定地域を個人として「保護」し、正規の地方行政官の介入を阻んでいていたことは、こうした私的権益確保の手法が、規模はともかく本質的にはスルターンと他のアミールたちとで大きく変わることはなかったという、その同質性を象徴する例と言えよう。

以上のように、チェルケス期のスルターンは、様々な形態によって大規模な土地を確保することに努め、それが拡大の一途を辿っ

31) 五十嵐 2006: 53; id. 2004a: 17.

32) 例えばバルクークは多くの国有地を自身の私有地に転用したが、それは純粋な私有財として相続の対象とはならず、没後は国庫に戻されたと思われる (五十嵐 2006: 84-85; id. 2004b: 31-32)。

33) al-Şayrafi, *Nuzha*, 4: 209; al-'Aynī, *Iqd'*, 562-563. また前述のように、ファラージュはアミールたちと同様に自身の賃借地とヒマーヤを管轄するディーワーンを置いていた (前掲註 20)。

34) al-Asadī, *Taysir*, 95-96, 135-136. ヒマーヤについては、Meloy 2004 を参照。

35) Cf. al-Maqrīzī, *Sulūk*, 4: 295.

36) Ibn Taghribirdī, *Nujūm*, 16: 160.

た。スルターンがこのような私的収入源を必要とした背景には、バフリー末期以来の国有地の流出を主因とした慢性的な財政難があったが<sup>37)</sup>、国家の長であるスルターンがその対策に苦慮する一方で、私有地、ワクフ、賃借、ヒマーヤ等アミールたちと同様の手段によって自ら国有地の獲得に努め、その流出に一役買っていたというねじれた構図は、一体どのように考えればいいのか。一つには、チェルケス朝の政治体制が、有力アミールの一人がマムルークの代表として国家の行財政運営の責任を担う、バフリー末期の「アターベク体制」の延長として発展したことを考えれば、あるアミールがスルターン位を獲得したとしても、国家財政を管理するのは別に、従来通り他のアミールと同様の手段で私財の獲得も同時に追求したことは驚くに当たらない<sup>38)</sup>。それとともに、ムフラド庁設立を契機としたチェルケス朝初期の財政制度の改編が大きく影響していた。すなわち、国家財政はワズィール庁 (Diwān al-Wizāra : 財務庁)・ハースス庁 (Diwān al-Khāṣṣ : 私財庁)・ムフラド庁の三つの財務官庁に分割され、各々が割り当てられた財源の中で業務を運営するという、各庁の独立採算制による運営方式となった<sup>39)</sup>。理念的には、各官庁が必要な出費を賄った後の余剰がスルターンのもとに集められることになるのだが、この時代の慢性的な財政難の中ではそれは現実的に不可能であった。このため、スルターンが支援者をつなぎ止めるための褒美や一時金、マムルーク軍団養成のための奴隷購入費など自身のための支出を賄うには、必然的にこれらの国家財政からは独立した財源が別個に必要とされたのであり、それはその後、後述する「スルターン直轄財源」の形成にもつながるのである。

## 2. スルターン私財担当官の変遷

既に見たように、バルクーク期に成立したアムラーク庁は、その後管轄財源の多様化とともに発展し、スルターンが掌握する、特に農地に関する諸権益を一括して管理していた。しかし (図表 I-1) から明らかなように、責任者の長官や監督官職が、819/1417年にイブン・アビー・シャーキル Taqī al-Dīn ‘Abd al-Wahhāb b. Abi Shakir が死亡した後、シャイフ期の半ばからバルスパーイの治世晩期まで 20 年以上に亘り史料中に見られなくなる。その背景には、その財産を実際に保管する「スルターン金庫 (al-Khizāna al-Sharīfa/Khizānat al-Sulṭān; pl. khazā’in)」が次第に拡大・組織化して役割を増し、財源自体の管理も直接担うようになったことがあった。

アラビア語で金庫を意味する「ヒザーナ」という語は、マムルーク朝時代を通じて史料中に表れるが、同じ単語であってもそれが具体的に指すものは時代とともに変遷した。そもそもバフリー期には、カイロの王城 (Qal‘at al-Jabal) に置かれていた「国庫 / (大) 金庫 (Bayt al-Māl/al-Khizāna (al-Kubrā))」に政府の収入が運ばれ、保管・出納されることになっていた。それがナーシール al-Nāṣir Muḥammad b. Qalāwūn 治世第三期 (709-41/1310-41) のハースス庁の設立に伴い、その長官 (nāzir al-khāṣṣ) が管轄する「私金庫 (Khizānat al-Khāṣṣ)」に多くの税収が流れるようになると、この「国庫」は役割を喪失し、ハースス庁長官がその調達・支給を担当する賜衣 (khil‘a) の保管倉庫となった<sup>40)</sup>。しかしナーシールの没後スルターンの実権が失われ、748/1347年以降アミールたちの合議制によって国家の行財

37) 五十嵐 2006: 38-44, 75-80; id. 2004a: 3-8; id. 2004b: 22-26.

38) 五十嵐 2006: 76-77, 79-80; id. 2004b: 23, 26.

39) 五十嵐 2006: 47-48; id. 2004a: 12.

40) al-‘Umarī, *Masālik*, 61; al-Maqrīzī, *Khīṭaṭ*, 3: 734. Rabie 1972: 144. ハースス庁の設立については Little 1998 を参照。なおこの「国庫」はこの時の役割喪失と賜衣倉庫化により「大金庫 (al-Khizāna al-Kubrā)」と呼ばれ、その後ハースス庁長官の監督下にあったことから「ハースス庫」

政が運営されるようになると、「私金庫」はアミールの高官であるラース・ナウバ (ra's nawba) の監督下に置かれるようになった<sup>41)</sup>。これによりハーッス庁はその名前が示すようなスルターン「私財」の監督という役割を失い、爾後政府の一財務官庁となったのである。

その一方で、チェルケス期になると、後宮内に置かれる「スルターン金庫」が、それが後宮にある故に宦官から任命された「金庫係 (khāzindār)」の管理のもと、国家の財務官庁から独立し独自の財源も備えたスルターン直轄の財庫として重要性を増した<sup>42)</sup>。この宦官の金庫係は、バルクーク期に前述のサンダルが務めていた「ザヒーラの金庫係」の系譜に連なる職であり、従来から存在し、十騎長や四十騎長のアミールが就任するマムルーク軍人のヒエラルヒーのなかに位置付けられた同名の武官職「(大) ハーゾィンダール (khāzindār (al-kabīr))」とは明確に区別される<sup>43)</sup>。このようにチェルケス期の「スルターン金庫」は、バルクーク期の私有不動産

庁設立を通じたスルターン私財の拡大によって、その財貨の保管を担う金庫として新たに脚光を浴びるようになった、国家の財務機関からは独立した金庫であった。

さて、バルクーク以後のスルターン私財の拡大により、この金庫を管轄する宦官の金庫係は重要性を増し、スルターンの側近として勢力を拡大した。シャイフ期の金庫係マルジャーノ Zayn al-Dīn Marjān al-Hindī (d. 833/1430) は、シャイフの即位以前から彼の宦官であったが<sup>44)</sup>、彼の在任中からこの金庫係の地位が高まるとともに、スルターン金庫に直結する財源が付与されたり、新たな役割が加えられるようになった<sup>45)</sup>。その会計業務を行う文官の「金庫監督官 (nāzīr al-khizāna)」が史料中に表れるようになるのもこの頃であり<sup>46)</sup>、特にジーアーン家 (Banū al-Jī'an) がマムルーク朝滅亡までスルターン金庫の業務に深く関わることとなった<sup>47)</sup>。またシャイフ期に前述の「シリアのスルターン賃借地監督官」職を金庫監督官が兼任している例は<sup>48)</sup>、この金庫がスルターンの財貨を

／ (Khizānat al-Khāṣṣ) と呼ばれるようになった [al-Qalqashandī, *Ṣubḥ*, 3: 472]。これはハーッス庁の財貨を納めるための「私金庫」と同名のため注意が必要である。この賜衣倉庫は 791/1389 年、バルクークに反乱し一時カイロを占領したミンターシュ Mintāsh によって牢獄に転用されて以後、見られなくなる [al-Maqrīzī, *Sulūk*, 3: 674; id. *Khiṭāṭ*, 3: 734-735]。

41) al-Maqrīzī, *Sulūk*, 2: 750-751. 五十嵐 2006: 21.

42) al-Maqrīzī, *Sulūk*, 3: 1067-1068; *Dīwān al-Inshā'*, fol. 127r.

43) このため、宦官の金庫係とアミールのハーゾィンダールは、同時期に各々別の人物が就任している。例として、Ibn Taghribirdī, *Ḥawādith*<sup>2</sup>, 1: 29-30, 106, 195, 333-334, 409-410.

44) 彼については、al-Sakhāwī, *Daw'*, 10: 153-154.

45) 816/1413 年には遺産庁 (Dīwān al-Mawārith) がワズィール庁とハーッス庁の管轄下から分離され、相続人のいない遺産は直接スルターン金庫に入るようになった [al-'Aynī, *Iqd'*, 164; al-Maqrīzī, *Sulūk*, 4: 257; Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Inbā' al-Ghumr*, 3: 8; al-Ṣayrafī, *Nuzha*, 2: 325]。818/1415-6 年にはカーバ神殿のキスワを賄う役目が同金庫の監督官に任された [Sulūk, 4: 382]。823/1419 年にはマルジャーノがハーッス庁の管轄権も握っている [Inbā' al-Ghumr, 3: 224, 238; al-Sakhāwī, *Daw'*, 10: 153-154]。なおスルターン金庫が独自の財源を持つようになったのは、フェラジュ期の 803/1401 年にイクターが直属の財源に転用されたのが最初である [Sulūk, 3: 1067-1068]。

46) シャイフ期にこの職を務めたアブド・アルバースィト Zayn al-Dīn 'Abd al-Bāsīt は、この職を足掛かりにその後軍務庁長官 (nāzīr al-jaysh) を主たる地位として文官の最高実力者となり、バルスバィ期にはその権力は頂点に達した [Ibn Taghribirdī, *Manhal*, 7: 137-139]。なおこの時代の金庫監督官職は、*Khiṭāṭ* や *Masālik* 等で言及される、国庫/大金庫を監督しハーッス庁長官の台頭とともに役割を失った同名の官職 [al-Maqrīzī, *Khiṭāṭ*, 3: 734; al-'Umārī, *Masālik*, 61. cf. Rabie 1972: 143-144] とは別の官であることに注意されたい。

47) ジーアーン家については、Martel-Thoumian 1992: 295-319.

48) Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Inbā' al-Ghumr*, 3: 249-250.

単に保管しておくだけではなく、組織としてその財源の運営にも積極的に関与するようになったことを示している。

さて、様々な手法による私財の確保に力を入れたバルスパーイのもとで、スルターン金庫はさらに多くの権益を加え、同時に金庫系の地位と役割は格段に重みを増した。彼の長い治世を通じ一貫して金庫係を務めたのが宦官のジャウハル・アルクヌクパーイー Jawhar al-Qunuqbā'i (d. 844/1440) であったが<sup>49)</sup>、バルスパーイが実施した有名な香辛料の専売制は彼の進言によるものであり<sup>50)</sup>、スルターン金庫に直接入る財貨を増やすための施策であった。また彼の時代には、従来ハーゥス庁に属していた造幣局 (Dār al-Ḍarb) の権益もこの金庫に加えられていた<sup>51)</sup>。そしてスルターン金庫の運営が評価された彼は、バルスパーイから正式にザヒーラの管轄も任され、その金の徴収も担当するようになったのである<sup>52)</sup>。彼はバルスパーイの没後もその地位を保ち、ジャクマク期には宦官長 (zimām) 職も兼務して、844/1440年に死去するまでスルターン私財運営の最高責任者として権力を握った。彼の死後、一時私財担当官が再び任じられたものの (図表 I-1, No. 9)、金庫係が宦官長職を兼ね、ザヒーラを監督し、スルターン財政の責任者を務めることがジャクマクの治世の大部分を通じて続いたのである<sup>53)</sup>。

以上見てきたように、バルクーク以降の「スルターン私財」拡大の中で、ザヒーラはバルスパーイ期頃までに、私的な財貨の蓄えから、特に土地と関係したスルターン個人の

収入源、「スルターン私領」として位置付けられるようになった。それとともに、ザヒーラを含め様々な手法で獲得されたスルターンの財貨が、スルターン金庫を核として管理されることとなった。しかしこうして集積した「スルターン私財」が、国家の権益を多数流用したものであったことから、その後次第に「私財」としての位置付けが曖昧なものとなり、スルターン位への就任者が直接掌握する、地位に付属した「スルターン直轄財源」へと発展していくこととなった。844/1441年にイブン・アルクワイズ Zayn al-Dīn 'Abd al-Raḥmān b. al-Kuwayzが、死亡したジャウハルの代わりにザヒーラその他を管轄する私財担当官に就任したのを最後に、ザヒーラがアムラークやアウカーフなどと並記されることはなくなり、単独で表記されることが常態となった。それは「ザヒーラ」という語が、スルターン職に付属する権益、直轄財源を総称するタームとなったためであった。次ではこうして発展を遂げたザヒーラの構造について詳しく見ていくこととしよう。

#### IV スルターン直轄財源の確立

##### 1. スルターン直轄領の形成

9/15世紀半ばのジャクマクの治世頃より、「ザヒーラの土地 (bilād al-dhakhira)」がスルターンの「私領」としての位置付けを超え、国家財政から独立してスルターン職の直接の管理下に置かれる「直轄領」へと発展した。このような変化がいつ、どのようにして起こったかは確定し難いが、前述のように「ス

49) 彼については、Ibn Taghribirdī, *Manhal*, 5: 38–42; Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Inbā' al-Ghumr*, 4: 167–169; al-Sakhāwī, *Daw'*, 3: 82–84.

50) Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Inbā' al-Ghumr*, 3: 423.

51) Ibn Taghribirdī, *Nujūm*, 15: 345.

52) al-Maqrīzī, *Sulūk*, 4: 1234; Ibn Taghribirdī, *Manhal*, 5: 40; al-Ṣayrafī, *Nuzha*, 4: 225–226. なおここでは「ザヒーラ」は、前述したようなスルターン保有の農地全般を意味するものと解釈する。

53) ジャクマク期からフシュカダム al-Zāhir Khushqadam 期 (865–72/1461–67) まで宦官長と金庫係の地位にあったファイルーズ Fayrūz al-Nūrūzī は、彼の私的な官房長 (dawādār) であるユースス Yūnus b. 'Umar b. Jarabughā を自身の監督下にあるザヒーラの運営担当者 (mutakallim) としていた [al-Ṣayrafī, *Inbā' al-Haṣr*, 467].

図表 III—ザヒーラの土地分布

下エジプト県名 (iqlim/a'māl)	ザヒーラ 地区数	イブラ (dnj)	元 イクター
カイロ近郊 (al-Dawāhi)	2	10,500	1
al-Qalyūbiya	3	16,375	0
al-Sharqiya	10	47,066.7+	10
al-Daqahliya	0	0	0
Ḍawāhi Thaghr Dimyāt	0	0	0
al-Gharbiya	7	35,462	6
al-Manūfiya	4	19,625	4
Abyār wa Jazīra Banī Naṣr	0	0	0
al-Buḥayra	4	6,880+	4
Fuwwa	1	3,500	1
Nastarāwa	0	0	0
Ḍawāhi al-Iskandariya	0	0	0
下エジプト合計	31	139,408.7	26
上エジプト			
al-Jiziya	0	0	0
al-Itfīhiya	4	13,566	3
al-Fayyūmiya	0	0	0
al-Bahnasāwiya	7	35,875	5
al-Ushmūnayn	2	3,812.5	2
al-Manfalūṭiyya	2	7,500	2
al-Asyūṭiyya	0	0	0
al-Ikḥmīmiya	1	2,031	1
al-Qūṣiyya	1	6,000	1
上エジプト合計	17	68,784.5	14
エジプト合計	48	208,193.2	40
ザヒーラ平均イブラ		4,525.9	

※数値の端数は小数点以下二桁目を四捨五入した。

※一つの地区がザヒーラの他、別の用途と共有されている場合（イクター、私有地、ワクフなど）、個別の収入高が明示されているものを除き、その地区の収入高を均等に割り、収入高を算出した。

※+は、イブラの明らかでない地区が含まれていることを示す。なおザヒーラ平均イブラは、イブラの不明な二つの地区を除外して算出した。

ルターン私領」を構成していた農地は、「賃借地」にせよ「私有地」にせよ、名目はどうあれ実情は政府直轄地やイクターなどの国有

地を流用したものが中心であった。以上に鑑みれば、これらの土地が次第で大規模化する中で、私的な保有形態を装うことなく、スルターンの直接管理下に移動した土地として公に認識されるようになったものと思われる。

（図表 III）は、*Tuhfa* をもとに、カーイトバーイ治世初期においてザヒーラに属しているエジプトの地区と、その内 777/1375-6 年の段階においてイクターに割り当てられていた地区の数をまとめたものである。これによれば、ザヒーラ地はエジプト全土で計 48 地区、収入高は 208,193.2 ディーナール・ジャイシー (dnj)<sup>54)</sup> に及んでいた。ただしその地区平均収入高は 4525.9 dnj と、エジプト全土の平均 (4107.8 dnj) と大差はないように、収入規模の大きな肥沃な地区というよりは、比較的中・小規模の地区を多く含んでいたと言える。またその分布は、上エジプトよりも下エジプトにやや多く、またシャルキヤ県に 10 地区と最も集中してはいるものの、全体としてはエジプト全土に分散していたと言えよう。ただし後述するように、ザヒーラの土地は出入りが頻繁に行われていたため、常にこのような傾向であった訳ではなく、あくまでこの時点での状態であることに留意する必要がある。

さて、スルターンは自己の収入源の拡大を目論み、機を見てエジプト・シリアの土地をザヒーラに編入することを試みたが<sup>55)</sup>、イクターとして軍人に分与されていた農地を直接ザヒーラに加えることも行った<sup>56)</sup>。イクターのザヒーラ編入の実例が史料中に表れることはそれ程多くはないものの、（図表 III）によればカーイトバーイのザヒーラの土地は、その大部分がかつてイクターであったことが

54) 土地からの収入高を表す単位。なお 713/1313~725/1325 年に実施されたナーシール検地 (al-rawk al-Nāṣiri) では、最高位の百騎長のイクターで、収入高は 10 万 dnj と規定された (Sato 1997: 154-156)。

55) al-Biqā'i, *Izhār*, 1: 211-212, 218; Ibn Taghribirdi, *Ḥawādith*<sup>2</sup>, 1: 300-301; al-Sakhāwī, *Tibr*, 386; Ibn Iyās, *Badā'i'*, 3: 13-14.

56) 863/1459 年: al-Biqā'i, *Izhār*, 3: 94. 865/1461 年: *Izhār*, 3: 258. 867/1463 年: Ibn Taghribirdi, *Ḥawādith*<sup>1</sup>, 770. 882/1477 年: Ibn al-Jī'an, *al-Qawāl al-Mustaṣraf*, 74-75.

わかるように（全48地区中40地区）、スルターンは他のマムルーク軍人の反発を招かない範囲で、密かにこのようなイクターの取込みを行っていたのである。

またそれとは逆に、ザヒーラの土地からマムルーク軍人に対するイクター分与が行われることもしばしばあった。史料では、857/1453年にジャクマクの後を継いだ息子のウスマーン al-Manṣūr ‘Uthmān（在位857/1453）が、ザヒーラに入っていた計三つの十騎長位のイクターを与えているのが初見であるが<sup>57)</sup>、特にスルターンの交代時には新スルターンによって行われた論功行賞と人事の再編に伴い、しばしばザヒーラからイクターが供出された<sup>58)</sup>。901/1496年のカーイトバーイの死去に伴い即位した息子のムハンマド al-Nāṣir Muḥammad b. Qāyṭbāy（在位901-04/1495-98）は、父の時代にザヒーラに入っていた約一千ものイクターを軍隊に分配し、ザヒーラには残さなかったという<sup>59)</sup>。また死亡時に限らず、スルターンの地位に揺らぎが生じた場合、軍隊を懐柔するためザヒーラからイクターを分与せざるを得なくなることもあった<sup>60)</sup>。ポリアクが前述のようにザヒーラ庁の役割を「欠員イクターの保管先」と見なしたのは、このようなザヒーラを軸としたイクターの編入と配分の事例からであったが、これはスルターンが収入増を意図してイクター地を自身の直轄領へ組み込む一方

で、政情に応じて他のマムルーク軍人に対する懐柔策として、そこからイクターを供与せざるを得なくなるという、土地という収入源をめぐる支配層内部での利益獲得競争とパワー・バランスの結果として生じたものであった。換言すれば、ザヒーラにどの程度の土地を集積させ、確固とした直轄財源を確立し得るかは、周囲のアミール、マムルーク軍団ら支配層内部でのスルターンの権力基盤の強弱やその時々との彼らとの関係に大きく左右されたのである。

さて、チェルクス時代には土地の保有形態が多様化したため、ザヒーラに集積した土地にも様々なものが含まれていた。例えばリザク地 (rizaq; sing. rizqa) も多くザヒーラに組み込まれていた<sup>61)</sup>。また農地には不可欠な水車 (dūlāb, pl. dawālib) の利権も加えられた<sup>62)</sup>。また、国家の有力者たちはイクター、私有地、ワクフ、賃借地、ヒマヤー等様々な形態で土地を保有していたが、当該人物が死亡したり、失脚した際に、これら「賃借」や「保護」された土地が政府直轄地に戻されたりすることはなく、その人物が保有していたそのままの形態でザヒーラに吸収されることも見られた。そして従来通りこれらを一つの単位として監督官が置かれ、そこからの収益をザヒーラに納めるという形で管理運営されたのである<sup>63)</sup>。このように、その人物が保有していた土地が一括して維持された背景に

57) al-Sakhāwī, *Tibr*, 427, 428; Ibn Taghribirdī, *Ḥawādith*<sup>2</sup>, 1: 339; id. *Nujūm*, 16: 29. cf. Nāṣir 2003: 116.

58) 865/1461年 al-Zāhir Khushqadam: Ibn Taghribirdī, *Nujūm*, 16: 258; ‘Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī, *Nayl*, 6: 118-119; Ibn Iyās, *Badā’i*, 2: 383. 872/1467年 al-Zāhir Timurbughā: *Nujūm*, 16: 381. 874/1470年 al-Ashraf Qāyṭbāy: al-Ṣayrafi, *Inbā’ al-Ḥaṣr*, 159-160.

59) Ibn Iyās, *Badā’i*, 3: 335; Ibn al-Shihna, *al-Badr al-Zāhir*, 51.

60) Ibn Iyās, *Badā’i*, 3: 292. cf. Nāṣir 2003: 116.

61) 前掲註59. なおリザク地とは、軍役を退いたアミールや軍人の孤児や寡婦、特定の宗教施設などに対し国庫から一種の恩給として与えられた農地である。Poliak 1939: 32-34; Ito 2003: 55-61.

62) al-Ṣayrafi, *Inbā’ al-Ḥaṣr*, 442-443; Ibn Taghribirdī, *Ḥawādith*<sup>1</sup>, 318.

63) 854/1450年秘書長 (kātib al-sirr) パーリズィー Kamāl al-Dīn Muḥammad al-Bārīzi の事例: Ibn Taghribirdī, *Ḥawādith*<sup>2</sup>, 1: 297; al-Sakhāwī, *Tibr*, 384. 859/1455年ダマスカス総督ジュルバーン Julbān al-Mu’ayyadī の事例: al-Biqā’i, *Izhār*, 2: 93-94. 862/1458年ハーッス庁・軍務庁長官イブン・カーディブ・ジャカム Jamāl al-Dīn Yūsuf b. Kātib Jakam の事例: Ibn Taghribirdī, *Ḥawādith*<sup>1</sup>, 318. 867/1463年官房長 (dawādār kabīr) ・百騎長ジャーニーベク Janībak nā’ib

は、何よりも土地制度上の問題があった。すなわち、バフリー末期から続く国家による土地の一元的掌握の弛緩はさらに顕著になり、特に9/15世紀中頃には国有地売却が急増した<sup>64)</sup>。このような状況下で、直轄地やイクターその他、私有地やワクフ地が拡大するとともに、さらにそれらが賃借・保護といった手法を通じて他者の手に渡ったように、土地に対する権利は錯綜し、重層化した。このため保有者が死亡したからといってそれらを単純に国庫に戻すということは困難であり、各人が生前中に保有していた形態そのまま、それらの権益を移動させるのが最も効率的であったものと考えられる。

## 2. ワクフとザヒーラ

歴代スルターンによって行われた、宗教施設の建設と大規模なワクフの設定は、既に見たように個人的収入源確保のための方策の一つであった。このようなワクフは、寄進したスルターン自身が管財人となったが、その下で誰が実際の運営を担っていたかは具体的な情報は少なく、確かなことはわからない。ただし、チュルク時代初期からワクフも含めたスルターンの「私財」が一元的に管理され、それが直轄財源として発展したという歴史的経緯を踏まえれば、スルターン自身のワクフもザヒーラに組み込まれ、その枠内で運営されていた可能性があるろう。

また、このような当該スルターンによって設定されたもの以外にも、多数のワクフ権益がザヒーラに組み込まれた。この時代、エジプト・シリアの農地や都市不動産の多くがワ

クフ化したが、それは単なる「善行」の枠を越え、ワクフ施設を核として各地に遍在する都市と農村の富を有機的に結び付ける、財の保有形態の一つとなった。そしてしばしば規定の「善行」への支出に必要な分量を超える大量の物件がワクフ財とされたことから<sup>65)</sup>、ワクフ財の管理・運用権をもつ管財人のポストは利権となり、ウラマーのみならず軍人、官僚らの獲得競争の対象となった。ワクフ管財人職は基本的に寄進者自身が務め、その死後の人事も寄進者によって細かく規定されてはいたものの、特に大規模なワクフの管財人に関してはしばしばスルターンがその任免に関与した<sup>66)</sup>。その中で、これらのポストを特定個人に与えることなく、ザヒーラに編入することも行われたのである。867/1463年に百騎長・官房長ジャーニーベク Jānībak nā'ib Judda が政争の結果、仲間の四十騎長タナム Tanam Ruṣāṣ とともに殺害された際には、両者のワクフはイクターやその他の権益とともにザヒーラに加えられた<sup>67)</sup>。また917/1511年までには、かつてダマスカスのシャーフィイー派大カーディーに属していたヌーリー病院 (al-Bimāristān al-Nūrī) の管財人職がザヒーラに属するようになった<sup>68)</sup>。またスルターン財政と深く関わり富貴を得ることとなった歴代の宦官長・金庫係が設定したワクフ (al-awqāf al-zimāmiya) も、ザヒーラ監督官が監督していた<sup>69)</sup>。

これらの事例はいずれも、ワクフ財をザヒーラに「没収」したものではない。ワクフとしての性格はそのままに、そこから財貨を徴収し管理運用する利権を管財人ポストを単

↗ Judda とムフタシブ (muḥtasib) ・四十騎長タナム Tanam Ruṣāṣ の事例：Ḥawādith<sup>1</sup>, 770.

64) Abū Ghāzi 2000: 26–28.

65) Cf. Petry 1994a: 199–200, 202–203; id. 2000: 104–105; Garcin and Taher 1995: 276–278, 301–302; Sabra 2004: 207; Lev 2005: 153–155. 前掲註 27 参照。このような手法はバフリー末期より見られるようになった (五十嵐 2006: 76–77, 78)。例として、al-Maqrīzī, *Khiṭāṭ*, 4: 686, 764.

66) 五十嵐 2006: 87–88, 89–90; id. 2004b: 34–35, 36, 41 note 59.

67) Ibn Taghribirdī, *Ḥawādith<sup>1</sup>*, 770.

68) Ibn al-Ḥimṣī, *Ḥawādith al-Ṣamān*, 2: 218.

69) Ibn Iyās, *Badā'ī*, 4: 35, 82, 197. この時代の宦官のワクフについては、Petry 1994b: 63–66.

位としてザヒーラのもとに組み入れたものであった。そしてそれは、永続的にザヒーラに囲い込まれていた訳ではなく、状況に応じて供出され、他の人物に与えられた。ここで注目したいのが、901/1495年にカーイトバーイの後を継いで息子ムハンマドが即位した時の事例である。彼は即位後間もなく、アミールやマムルーク軍団を自派につなぎ止めるためザヒーラから大量のイクターを供出し、彼らに分配したが、この時同時に、ザヒーラに入っていたマドラサその他のワクフ管財人職を供出し、配分している<sup>70)</sup>。このようなザヒーラを軸としたワクフ権益の集積と配分は、先に見たイクターの事例と基本的に同じ構図であり、ワクフが財産保有の一形態として、管財人職を単位として移動していたこと、それが財の獲得源として扱われていたことを端的に示している。

### 3. 商業とザヒーラ

スルターンは土地のような恒常的な収入源を確保する一方で、商業活動に介入し、そこから現金を徴収することにも腐心した。このためザヒーラの権益には、商業に関するものも多く含まれた。まず最初に、香辛料貿易からの収入について見ていこう。シャイフは815/1412年の即位後間もなく、アレクサンドリアにて香辛料取引に携わるヴェネチア商人に対し、最初に彼の個人所有の香辛料から一定の分量を市価よりも高い金額で購入す

ることを義務付ける「優先的な強制販売」を実施した<sup>71)</sup>。続くバルスバーイはそれをさらに進め、スルターンのみが香辛料貿易に携わり、一般商人の参画を排除する専売制を導入した。この専売こそ間もなく廃止されるものの、シャイフが行った「優先的な強制販売」の手法はマムルーク朝滅亡まで続き、香辛料貿易は歴代スルターンの重要な収益源となったのである<sup>72)</sup>。

さて、カーイトバーイ即位以降の王朝末期には、スルターンの香辛料取引に携わる「スルターンの商人 (tujjār al-sultān)」は別名「ザヒーラの商人 (tujjār al-dhakhira al-sharifa)」とも呼ばれていた<sup>73)</sup>。また前述のように、ガウリー期にマムルーク朝とヴェネチアとの間で締結された香辛料貿易に関する通商協定には「dacchieri」すなわちザヒーラについて言及されている。それによれば、毎年秋に一定期間アレクサンドリアに逗留を許されたヴェネチア商人は、ザヒーラから210 sporte<sup>74)</sup>の胡椒の購入を義務付けられ、その代金もザヒーラへ支払った<sup>75)</sup>。またザヒーラの胡椒の価格は、在アレクサンドリアのヴェネチア領事が選任した4人の商人と、ザヒーラ側の人間の協議によって決定され、この委員会がザヒーラの商人と協議した<sup>76)</sup>。一方でヴェネチア側がもたらす貴金属(金銀銅)は、ザヒーラが独占的に取引した<sup>77)</sup>。また取引全般に課せられた関税も、その一部がザヒーラに入るとともに、追加逗留費の支払や

70) Ibn al-Jī'ān, *al-Badr al-Zāhir*, 52.

71) Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Inbā' al-Ghumr*, 2: 521. Ashtor 1983: 276-277.

72) バルスバーイの商業政策については Darrag 1961: chap. 6; Meloy 2003; Ashtor 1974-79; id. 1983: 277-283; 古林 1968 を、マムルーク朝とイタリア港湾都市との香辛料貿易については Ashtor 1983: chap. 5; 'Abd al-Nabī 2001: 131-134; Horii 2003 を参照。

73) Horii 2003: 180-181. 例として、カーイトバーイ期にアレクサンドリアのザヒーラの商人であったイブン・ウライバ Muḥyī al-Dīn (Zayn al-Dīn) 'Abd al-Qādir b. 'Ulayba (d. 890/1485): 'Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī, *Nayl*, 7: 429; al-Sakhāwī, *Daw'*, 4: 259-260; Ibn Iyās, *Badā'i'*, 3: 221.

74) 1 sporta=536 ポンド(約 243 kg) もしくは 480 ポンド(約 218 kg) (Wansbrough 1963: 525, note 4)。210 sporte は約 51,057 kg もしくは 45,723 kg にあたる。なお Reinaud 1829: 25, 27, 35, 39 では coufe という単位が使われているが、同じものと考えられる。

75) Reinaud 1829: 27, 33 (art. 4, 12); Wansbrough 1963: 525-526 (art. 2).

76) Reinaud 1829: 24-25 (art. 1).

77) Ibid. 35-36 (art. 14).

滞り期間違反者の没収財産もザヒーラに入るとされた<sup>78)</sup>。またザヒーラ監督官がこの期間、取引の監督のためアレクサンドリアに滞りし<sup>79)</sup>、品質検査済の香辛料を保管する箱の鍵は、ヴェネチア領事とザヒーラ監督官によって保管されたという<sup>80)</sup>。アレクサンドリアにおいて外国商人から徴収する関税収入は、本来ハーッス庁の収入源であったが<sup>81)</sup>、このようにスルターンの香辛料の取引からの収入だけではなく、アレクサンドリアでの商業活動に関わる税収の一部がザヒーラに組み込まれたのである<sup>82)</sup>。

スルターンは香辛料以外にも、穀物を市場価格が安い時に買占め、値段が上昇した時に売却する穀物投機をはじめ、砂糖や木材、薪などの物品の取引にも参画し、利益を得ていた。こうした商品を保管していたのが「スルターンの倉庫 (al-Ḥawāṣil al-Sultāniya)」や「穀物庫 (shuwan, ahrāʾ)」であったが<sup>83)</sup>、末期にはこれらは「ザヒーラ倉庫 (Ḥawāṣil al-Dhakhīra)」, 「ザヒーラの穀物庫 (Shuwan al-Dhakhīra)」と呼ばれ、それを管轄する特別な官吏も置かれた<sup>84)</sup>。このようにスルターンの商業活動全般がザヒーラに属するように

なったのである。

またザヒーラが持つ商業に関する収入源として、カイロの市場 (sūq) から徴収された月税 (mushāhara) と週税 (mujāmaʿa) がある。これらは8/14世紀中葉までには存在が確認できる、ムフタスィブが市場から徴収した税である<sup>85)</sup>。これらの税がザヒーラに納められていることが確認できる例は907/1502年が最初であるが<sup>86)</sup>、スークの商人にザヒーラへの納税義務が課せられる事例はそれ以前にも見られ (892/1487年)<sup>87)</sup>、王朝末期を通じた商業活動への課税強化の結果、これらの税がザヒーラの収入とされたものと思われる。

ところで、スルターンによる商業活動への介入は末期に限らずチュルク時代を通じて行われていたが<sup>88)</sup>、カーイトバーイ以前のスルターンの商業活動に関しては、同時代史料に「ザヒーラ」の語はほとんど表れない<sup>89)</sup>。スルターン個人の商業活動を担当する機関は「スルターンのマトジャル (al-Matjar al-Sultāni)」と呼ばれていた<sup>90)</sup>。こうした商業活動と関係して「ザヒーラ」の語が年代記中に表れるのは、管見の限りカーイトバーイ期

78) Ibid. 26-27, 41, 42.

79) Wansbrough 1963: 528 (art. 12).

80) Ibid. 528-529 (art. 15).

81) al-Zāhiri, *Ḥubda*, 108.

82) また877/1473年にカーイトバーイからヴェネチアに送られた書簡にも、「ザヒーラの胡椒」について言及されている (Wansbrough 1961: 206, 211)。こうした香辛料は、紅海の港ジッダに來航した商人に対し、香辛料の積荷の三分の一をインドのカリカットでの仕入値でスルターンに売却することを義務づけた強制買付などを通じて調達された (Ferrand 1920: 19; 佐藤圭四郎 1981: 204-205)。またセント・カテリーヌ修道院文書に含まれる891/1486年と892/1487年付の三通の勅令では、カーイトバーイが紅海側の港湾都市トゥール al-Ṭūr の官吏たちに対して、同地の倉庫 (ḥawāṣil) に「ザヒーラの香辛料」を貯蔵しておくよう命じている。Ernst 1960: 182, 184, 188. cf. 古林 1968: 54.

83) al-Zāhiri, *Ḥubda*, 122-123.

84) al-Sakhāwī, *Wajīz*, 3: 971; Ibn Iyās, *Badāʾiʿ*, 4: 413. 穀物の買占や特定商品の専売に関しては, al-Asadī, *Tāyīr*, 138-146.

85) Berkey 2004: 269-270.

86) Ibn al-Ḥimṣī, *Ḥawādiṯ al-Zamān*, 2: 145. cf. Ibn Iyās, *Badāʾiʿ*, 4: 25.

87) ʿAbd al-Bāsiṯ al-Ḥanafī, *Nayl*, 8: 73-74.

88) バルスバーイの小麦と砂糖取引への介入と失敗を扱った最新の研究が, Meloy 2005 である。

89) 9/15世紀末以降に著された史料では、この時期もスルターンの商業活動に関連して「ザヒーラ」の語が用いられているが [cf. ʿAbd al-Bāsiṯ al-Ḥanafī, *Nayl*, 5: 80; id. *Rawḍ*, fol. 230r], それはこの語が著者の時代の意味合いで用いられたものと思われる。

90) Ashtor 1983: 283; 古林 1968: 53-54.

の 877/1472 年に、前述の商人イブン・ウライバが「スルターンの商人」と「ザヒーラ監督官」に就任しているのが最初である<sup>91)</sup>。一方でこの時代までにはマトジャルという用語は史料中にほとんど見られなくなった。ザヒーラが「スルターン直轄財源」を幅広く意味するようになったことにより、マトジャルの機能や役割もザヒーラの中に含まれるようになったことを示していよう。

#### 4. その他

チュルケス時代には、軍人職はもとより、各種の財務官・行政官などの文官職、カーディーやワクフ管財人などの宗教職も、任命時に一定額を支払う売官が広まり、スルターンの現金獲得手段として多用された。また、それが多くの場合分割で支払われたことや、官職の権益化により公金と私財との区別が曖昧になったことにより、解任・死亡時に会計監査を伴う財産没収が行われることが常態となった<sup>92)</sup>。このような売官や財産没収による現金の支払は、史料中では一般的に「スルターン金庫に支払う」と表現されたが、9/15世紀中頃以降の史料では、しばしば「ザヒーラに支払う」と表現されたように<sup>93)</sup>、スルターン金庫とザヒーラが同義で用いられることもあった。ただし、両者が明確に区別され

ている例もあり<sup>94)</sup>、前者がスルターンの財貨が納められる具体的な「金庫」として、「スルターン直轄財源」としてより幅広くまた観念的な意味合いを持つ後者に含まれるものと見なされたのである。

ザヒーラには他にも、時に応じて造幣局の管轄権など国家や他の官職に属する様々な権益が加えられた<sup>95)</sup>。またザヒーラはシリアの各地にも多くの収入源を保有していた。例えば 857 年サファル月/1453 年 2 月には、シリア地方にあるザヒーラの権益からの収入 95,000 ディーナール (dn) がカイロへ届けられている<sup>96)</sup>。またナーブルス Nābulus 地方にはザヒーラの権益が特に多く存在した<sup>97)</sup>。またジャクマク期に時の宦官長・金庫係ファイルーズの下でザヒーラの運営を任されていた前述のユヌスは、イーナール al-Ashraf Īnāl の治世 (857-65/1453-61) の一時期正式にザヒーラ長官となると、シリア各地を廻って各地のザヒーラの権益を担当する財務官 (ustādār) を任命したという<sup>98)</sup>。

以上のようにザヒーラは多種多様な収入源を獲得し、拡大の一途を辿った。ザヒーラの運営責任者は、それが「私財」の位置付けであった時と同様に宦官長・金庫係が担当するのが基本であったが<sup>99)</sup>、その強化のため独立した人物が立てられることや<sup>100)</sup>、国家の有

91) al-Ṣayrafī, *Inbāʾ al-Ḥaṣr*, 489-490. 彼は「ザヒーラの商人 (tājir al-dhakhīra)」とも述べられる [ʿAbd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī, *Nayl*, 7: 429]。なお彼が死亡した際には、その遺産からザヒーラに属する分が差押えられている [al-Sakhāwī, *Wajiz*, 3: 959-960. 965-966]。彼については前掲註 73 を参照。

92) 売官と財産没収については、Miura 1997; Martel-Thoumian 1992: 88-92; id. 2005; Aḥmad 1979.

93) al-Ṣayrafī, *Nuzha*, 1: 322, 372, 440; 3: 177, 381, 398-399, 436; al-Biqāʾī, *Izhār*, 2: 15; Ibn al-Ḥimṣī, *Ḥawādīth al-Ḍamān*, 2: 245-246.

94) Ibn Taghribirdī, *Ḥawādīth*<sup>1</sup>, 449.

95) Ibn al-Ḥimṣī, *Ḥawādīth al-Ḍamān*, 2: 145.

96) al-Biqāʾī, *Izhār*, 1: 317.

97) al-Biqāʾī, *Izhār*, 3: 241.

98) al-Ṣayrafī, *Inbāʾ al-Ḥaṣr*, 431-432, 467-468. 前掲註 53 参照。

99) 例えばジャクマク期の 846/1442 年に同職に就任し、865/1461 年のフシユカダム治世初期に死亡するまで計 5 人のスルターンのもとでその地位にあった前述のファイルーズ: Ibn Taghribirdī, *Nujūm*, 16: 29; id. *Ḥawādīth*<sup>2</sup>, 1: 340; al-Sakhāwī, *Tībr*, 428; al-Biqāʾī, *Izhār*, 1: 300.

100) ジャクマク・イーナール期のナッハース Abū al-Khayr al-Naḥḥās (d. 864/1459): al-Biqāʾī, *Izhār*, 3: 65; Ibn Taghribirdī, *Ḥawādīth*<sup>1</sup>, 326, 392; id. *Nujūm*, 16: 132, 210-211. 彼については、Mortel 1995.

力な文官が管轄することもあった<sup>101)</sup>。しかしこれらの多様な権益を一人の人物が一元的に管理することは次第に困難になっていった。カーイトバーイ以降、スルターン財政のさらなる強化により、直轄財源の監督は側近である低位のマムルーク兵や文官たちによって分掌されるようになるのである<sup>102)</sup>。

## V スルターン財政拡大の意味

### 1. 行財政運営におけるザヒーラの役割

スルターン財政の成立は、それが「私財」としての位置付けであった頃より、第一にスルターンの直轄収入を確保・拡大することを目的としたものであった。このため、そもそもその収入は決められた支出先を持たず、スルターンの裁量に任されていた<sup>103)</sup>。その用途が史料中に表れることは少ないが、スルターン金庫から直接支出される軍隊の遠征手当その他の臨時ボーナス（ナファカ nafaqa）の他<sup>104)</sup>、政権運営のための政治資金、自身のマムルーク兵養成のための奴隷購入費等に用いられていたと考えられる<sup>105)</sup>。その他の事例としては、801/1399年にバルクークが死去した時、彼の私財担当官が彼の墓廟でのセレモニーに関する支出を賄っている<sup>106)</sup>。またそれを個人としての善行に費やす事例も

見られ、876/1471年、カーイトバーイはアムル・モスクの状況を視察し、その修繕を命じて費用をザヒーラの金から支出した<sup>107)</sup>。

このように、元来スルターン個人の支出を賄うものであったスルターン財政は、ここまで見てきたように、9/15世紀中頃に「私財」としての位置付けから地位と結びついた「スルターン直轄財源」へと発展した。その誘因としては、国家の行財政運営面におけるスルターン財政の役割と必要性の増大があった。すなわち、この時代以降、国家の財政状況は加速度的に悪化し、ワズィール庁やムフラド庁といった国家の財務組織の運営は滞った。このような状況の中、これらの業務を遂行させるため、ザヒーラからの補填が恒常的に行われるようになったのである。それが最初に確認できるのが、イーナールの治世にあたる860年サファル月/1456年1月である。この時、ワズィール庁が担当していたマムルーク軍団その他に対する毎日の肉の支給が収入不足から不可能となり、ワズィールのイブン・アンナッハール Faraj b. al-Nahḥāl は姿を隠した。間もなく彼が帰参したため、イーナールは彼を留任させたが、その際ワズィール庁に対してザヒーラから毎日40,000 dhが補填されることになった<sup>108)</sup>。863/1458年にはザヒーラからの補填額がさらに増加され、一

101) ジャクマク・イーナール期のハーッス庁・軍務庁長官イブン・カーティブ・ジャカム Jamāl al-Din Yūsuf b. Kātib Jakam (d. 862/1458) : al-Biqā'ī, *Izhār*, 1: 297, 300, 350; Ibn Taghribirdī, *Hawādith*<sup>2</sup>, 1: 370.

102) 五十嵐2006: 第3部第7章; id. 2007b.

103) al-Qalqashandī, *Ṣubḥ*, 3: 453. cf. Nāṣir 2003: 116-117.

104) Cf. al-Ṣayrafī, *Nuzha*, 3: 266.

105) *Sulūk* では、マムルーク軍団へのナファカ、アミールヤトルコマーンへの贈物 (ṣilāt)、マムルーク奴隷の購入費用、軍事遠征費がジャクマクによって賄われた「スルターンの支出 (nafaqāt al-sulṭān)」と称されている [al-Maqrīzī, *Sulūk*, 4: 1228-1229]。また *Ta'rikh al-Malik al-Ashraf Qāyṭbāy* でもスルターン金庫からの支出として、遠征費、マムルーク奴隷・武具・馬・矢・槍の購入費、建築・修繕費、褒美 (in'am), 贈物、慈善 (birr), サダカへの出費が挙げられている [fol. 15r-v]。

106) al-'Aynī, *'Iqd*<sup>3</sup>, 493.

107) 'Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī, *Nayl*, 7: 18. またバルスバーイは死の間際にスルターン金庫から施しを行うことを命じている [al-Ṣayrafī, *Nuzha*, 3: 401]。

108) Ibn Taghribirdī, *Hawādith*<sup>2</sup>, 1: 492-493; 'Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī, *Nayl*, 5: 455. なおこの翌月には、以前にアミールたちが持っていたイクターやその他の権益からの収入、一日35,000 dhが補填額に上乘せられている [*Hawādith*<sup>2</sup>, 1: 494-495. cf. *Nayl*, 5: 456-457]。

日計 70,000 dh となった<sup>109)</sup>。またマムルーク軍団への月給支払を担当したムフラド庁に対する補填も 863/1459 年以前から行われており<sup>110)</sup>、867/1463 年には毎月 10,000 dn がザヒーラからムフラド庁に補填されることが決まった<sup>111)</sup>。結局これは実現されなかったが、その後も月に 8,000 dn の補填が続けられた<sup>112)</sup>。888/1484 年にはハーッス庁の任務である、犠牲祭で分配する羊・牛等の犠牲獣の支給が困難となり、スルターンによって補填されている<sup>113)</sup>。財政難に陥ったこれらの官庁に対して、一時的な補填や財源付与がスルターンによって行われることはそれまでもあったが<sup>114)</sup>、イーナールの治世からは恒常的に実施されるようになった<sup>115)</sup>。この頃までに国家財政の機能不全が限界まで達し、その運営上ザヒーラによる支援が不可欠になったのである。

またザヒーラは、支給業務を担当する財務官庁への補填や、軍隊へのナファカなどの臨時出費を賄うだけではなく、自ら定期的な支給業務も担うようになった。850/1446-7 年頃にはザヒーラからあるカーディーに対して月 3,000 dh の手当が支給されていた<sup>116)</sup>。また 915/1510 年までには、犠牲祭における軍隊や官僚、法学者 (faqih) への犠牲獣の支給の一部がザヒーラから行われていた<sup>117)</sup>。また 914/1508 年までには、引退した (tarkhān) アミールに対する恩給もザヒーラから賄われ

るようになった<sup>118)</sup>。これらの支給は、本来こうした業務を担うことになっていたハーッス庁などの政府の担当機関の困窮から、ザヒーラがその一部を肩代わりするようになったものと思われる。

またそれ以上に、カーイトバーイ期になると、イクターを与えられずザヒーラからの現金と小麦の支給のみを割り当てられたアミールまでが出現した。管見の限り、886/1481 年にエジプトの百騎長・会議長 (amir majlis) に就任したウズダムル Uzdampur が最初の事例である。彼はマムルーク軍人のヒエラルヒーの中で会議長という高位の職にあったにもかかわらずイクターを持たず、代わりにザヒーラから毎月 1,000 dn の月給を受けていたという<sup>119)</sup>。

このように国家の行財政・軍事面におけるザヒーラの役割の拡大は、イクター制と直轄地収入を基礎としたそれまでの国家体制が限界に達していたことを如実に表している。チュルケス期を通じた歴代スルターンによる財政再建のための努力は、時に一定の成果を上げたものの、長期的に見れば国有地の流出という根本的な問題を解消するものではなかった。そればかりか、スルターン自身も国有地の転用によって自身の財源確保に努めたことは、土地制度の崩壊を一層押し進める結果になった<sup>120)</sup>。このような状況の中、スルターン自身が掌握する財産によって国家の取

109) Ibn Taghribirdī, *Hawādith*<sup>1</sup>, 321.

110) al-Biqā'i, *Izhār*, 3: 65, 93; Ibn Taghribirdī, *Hawādith*<sup>1</sup>, 392.

111) Ibn Taghribirdī, *Hawādith*<sup>1</sup>, 757.

112) Ibn Taghribirdī, *Hawādith*<sup>1</sup>, 449, 477, 770.

113) 'Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī, *Nayl*, 7: 363.

114) 五十嵐 2006: 52; id. 2004a: 17, 33-34 note55. al-Maqrīzī, *Sulūk*, 4: 966; al-Ṣayrafī, *Nuzha*, 3: 370; al-Biqā'i, *Izhār*, 1: 420-421.

115) Ibn Taghribirdī, *Hawādith*<sup>1</sup>, 292.

116) al-Biqā'i, *Izhār*, 2: 176.

117) Ibn Iyās, *Badā'i*<sup>1</sup>, 4: 170.

118) Ibn Iyās, *Badā'i*<sup>1</sup>, 4: 139, 338.

119) Ibn Iyās, *Badā'i*<sup>1</sup>, 3: 190. 同様の例は他にも見られ [Badā'i<sup>1</sup>, 4: 100, 436], チュルケス期を通じたイクター制の崩壊とマムルークの俸禄依存の進行を象徴する事例と言えよう。cf. 五十嵐 2006: 62; id. 2004a: 26.

120) 五十嵐 2006: 89; id. 2004b: 36.

入不足が補われるようになり、次第にそれが国家の行財政運営上不可欠になっていった。スルターンの「私財」から「直轄財源」への発展はこのような状況下で起こったのであった。そして国家財政を穴埋めする役目を負ったザヒーラの負担は増加し続け<sup>121)</sup>、ザヒーラの運営が滞ると国家財政も機能しなくなったことから<sup>122)</sup>、さらにその拡大へとつながった。こうしてザヒーラを核としたスルターン財政の拡充と、国家財政のスルターン財政への従属化が進行し、特にカーイトバーイの治世以降、スルターン財政はそれまでの補完的役割を超え、むしろそれが中核となって国家の行財政が維持運営されることとなるのである。

## 2. スルターン交代時のザヒーラ：権益の集積と流出のサイクル

前稿で私は、バルクークが在位中に集積した私財が没後どのように扱われたのか考察し、それが地位と同様、基本的には世襲されることのない「一代限りの財産」であったことを指摘した<sup>123)</sup>。彼の後、スルターンによる財産の確保が一般化し、規模も拡大する中で、その没後の処遇については特に議論が生じることはなく、あるスルターンが生存中に貯えた財産は、それが当初のような「私財」の名目であれその後「スルターン直轄財源」として確立した後であれ、基本的には後任スルターンによって引き継がれるようになったようである。ただしそれは、後継スルターンが前任者の資産をそのまま自身のものとして

自由に扱えたことを意味するものではない。新スルターンが即位後最初に行うのが、「バィアのナファカ (nafaqat al-bay'a)」の支給であった。これはアミールやマムルーク軍団が新スルターンに忠誠を誓う代わりに受取った下賜金であり、新スルターンがその配分を通じ、広くマムルーク全体から支援を獲得する最初の機会でもあった<sup>124)</sup>。このため前スルターンによって蓄えられた財貨は、この機会にそのほとんどが供出されることとなった。824/1421年に即位したタタル al-Zāhir Ṭaṭar は、その直後から反対勢力との内戦に勝ち抜く必要があったこともあり、わずか数ヶ月の治世の間に前スルターン・シャイフがスルターン金庫に遺した財貨を全て自派のアミールとマムルーク軍団に分配したという<sup>125)</sup>。また 842/1438年にジャクマクが即位した時には、スルターンのマムルーク軍団だけでなくアミールたちのマムルーク兵に対してもバィアのナファカが支給され<sup>126)</sup>、また軍事遠征が重なったこともあり、彼の即位後3年間で費やした出費は300万 dnに及んだ。これは前スルターン・バルスバーイがスルターン金庫に遺していた財産を全て使い果たしたうえに、それを50万 dnも上回ったという<sup>127)</sup>。このため、前任者のスルターン財政の規模が小さく、スルターン金庫に遺された現金が乏しかった場合は、ナファカの支給が困難となり、スムーズな権力の確立に支障を来すことになった<sup>128)</sup>。いずれにせよこの金庫の蓄えはスルターンの交代によりそのほ

121) al-Biqā'i, *Iḡhār*, 3: 258.

122) al-Biqā'i, *Iḡhār*, 3: 67-68.

123) 五十嵐 2004b: 31-32, 34, 36; id. 2006: 84-89.

124) バィアのナファカについては, Ayalon 1958: 56-57. 新スルターン即位時のアミールに対するナファカ (nafaqat al-umara') の事例として, Ibn Taghribirdī, *Ḥawādith*<sup>2</sup>, 1: 371; Ibn Iyās, *Badā'i*<sup>2</sup>, 2: 311, 371-372; 'Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī, *Nayl*, 5: 396; 6: 103.

125) al-'Aynī, *Iqd*<sup>2</sup>, 157-158. なおシャイフは死亡時、金庫に150万 dnを遺したという [Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Inbā' al-Ghumr*, 3: 257].

126) al-Maqrīzī, *Sulūk*, 4: 1091; Ibn Taghribirdī, *Nujūm*, 15: 263; 'Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī, *Nayl*, 5: 56.

127) al-Maqrīzī, *Sulūk*, 4: 1228-1229; al-Ṣayrafī, *Nuzha*, 4: 215; 'Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī, *Nayl*, 5: 139.

128) al-Manṣūr 'Uthmān: Ibn Taghribirdī, *Ḥawādith*<sup>2</sup>, 1: 337-338, 348; al-Sakhāwī, *Tibr*, 426; 'Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī, *Nayl*, 5: 380. al-Ashraf Ināl: *Ḥawādith*<sup>2</sup>, 1: 359-360, 362-363, 382-383; *Nayl*, ↗

とんどが一度流出することになったのである。

また現金以外にも、財源としてザヒーラに集積した農地も同様に、スルターンの交代によってその多くが一度イクターとして分与され、放出された。同様にザヒーラに組み込まれていた多くのワクフ管財人職も放出されている。いずれも同じく即位時に実施された、アミールや文官・ウラマーの支援を獲得するための官職＝富の獲得源の配分の中で供出されたのであった<sup>129)</sup>。

一方、スルターン自身がワクフに設定した資産について見ると、これも次のスルターンに継承される類のものではない。寄進したスルターンが死亡した後の管財人人事については、各々がワクフ設定時に規定していた。シャイフの場合では、彼の男性の子孫の一人とエジプトの官房長と秘書長が協力して管財人職を務め、子孫で適切な人物がない場合はこの両官職就任者のみが、このいずれかが不可能な場合はもう片方が単独で務め、両者いずれも不可能な場合は大カーディーに任されることとなっていた<sup>130)</sup>。またバルスバーイのワクフでは、彼の子孫と官房長が協力して行うことが定められていた<sup>131)</sup>。ただしスルターンの子孫は、政権交代によってその地位を逐われ、投獄や幽閉の憂き目にあうのが常態であったから、実際にはこれらの高官が管財人職務の遂行において主導的役割を果たしていたと思われる<sup>132)</sup>。事実、シャイフのワクフ文書には、832年ラジャブ月12日

/1429年4月16日付で秘書長と官房長が二人で管財人として業務に携わっていることを示す文書が書き加えられ<sup>133)</sup>、また同文書の裏面には、845年シャウワール月11日/1442年2月22日付で、「ワーキフの男の子孫で成年に達しているものがないため」、時の秘書長バーリズィーと官房長タグリービルディー Taghribirdī の二人のみで管財人を務める旨が記載されている。また、後継スルターンが前任者のワクフ全体を解消することはなかったものの、それらが財産保有手段として、ワクフ施設の実際の運営に必要な分量を超えて物件が寄進されていたことから、余剰のワクフ物件を没収したり、それをイクターとして分与することも見られた。例えばシャイフは、ファラジュのワクフから多くの農地を没収したが、その中には彼が父バルクークの建設したザーヒリーヤ学院 (al-Madrasa al-Zāhiriya) に対して寄進したものも含まれていた<sup>134)</sup>。またフシュカダムも即位後、イーナールのワクフの土地を没収し、アミールやマムルーク軍団へのイクター分与を行った<sup>135)</sup>。

このように、スルターンのもとに集積した資産・財源はそのまま次のスルターンに継承されていく訳でなく、交代時にその多くが一度放出された。そして新スルターンは、アミール時代に獲得した自身の土地 (イクター、私有地、賃借地、ヒマーヤ等) を出発点として<sup>136)</sup>、その治世を通じてザヒーラの拡大を意図し、再びイクター、ワクフ管財人、その他

↗ 5: 405. al-Zāhir Khushqadam: Ibn Taghribirdī, *Ḥawāḍith*<sup>1</sup>, 408-409; Ibn Iyās, *Badā'i*<sup>2</sup>, 2: 385; *Nayl*, 6: 123. Qānṣūh al-Ghawri: *Badā'i*<sup>3</sup>, 4: 13-14.

129) 前掲註 59, 70.

130) Waqf Deed, Sultan al-Mu'ayyad Shaykh, WA, q938; 'Abd al-'Alim (ed.), 154.

131) Waqf Deeds, Sultan al-Ashraf Barsbāy: 7.

132) Cf. 五十嵐 2006: 87-88; id. 2004b: 35-37.

133) Waqf Deed, Sultan al-Mu'ayyad Shaykh, WA, q938; 'Abd al-'Alim (ed.), 158-160.

134) al-Maqrīzī, *Sulūk*, 4: 237; id. *Khiṭāṭ*, 4: 688.

135) Ibn Taghribirdī, *Nujūm*, 16: 258. cf. al-Biqā'i, *Izhār*, 3: 313.

136) カーイトバーイの農地の購入は即位の17年前、855/1451年から見られるという [Petry 1994a: 198]。一方、新スルターンが他の有力アミールの強制によって、アミール時代の権益を手放すことを強いられるケースもあった。例として、父バルスバーイの時代に百騎長の地位にあり [al-Maqrīzī, *Sulūk*, 4: 989]、その死後即位したユースフ al-'Aziz Yūsuf b. Barsbāy (在位 842/1348) の事例: *Sulūk*, 4: 1057; 'Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī, *Nayl*, 5: 49. また彼の廃位時における保有権益の没収に ↗

諸々の財源を機を見て集積していくというように、特に土地に関する権益の集積→分配→集積というサイクルが、スルターンの交代ごとにくり返されるという構図をもっていた。そしてこのような権益の集積はスルターンに限定されたものではなく、他のアミールたちが同様に土地・ワクフ・その他様々な権益の獲得に努めたことと対応していたのである。すなわち、本稿で示したスルターン財政の展開は、表面上の印象とは異なり、構造的にはスルターン権力の質的な変化や一方的な強化を意味するものではなかった。むしろ、支配集団を構成する高位のアミールたちと、その第一人者であったスルターンとのいずれもが、様々な私的権益を集積し、国家制度の枠組みを越えた権力基盤を形成する過程であったといえよう。

## VI おわりに

以上見てきたように、チュルク時代を通じたスルターン財政の拡大とともに、「ザヒーラ」は当初の動産の意味からスルターンが保有する農地を代表するタームとなり、最終的にはスルターン直轄財源を総称する意味を持つようになった。このような語意の変遷は、そのままスルターンの私財の拡大と「私領」の形成、さらにその直轄領化と財源の多様化という、スルターン財政の発展のあり方と軌を一にするものであった。このようにスルターン財政が発展を遂げたまさに同じ時期、マムルーク朝の伝統的な土地制度は崩壊し、国有地の流出によってイクター制と政府直轄地を二本の柱として成り立っていた国家体制は動揺を来していた。こうした国有地の流出こそがこの時代の財政難の根本原因であったが、それは国家の有力者たちが様々な手法により国家財産を獲得・私有することを志向し続けたことに起因した。しかしマムルークの

代表者としてその総意のもと即位したチュルク期のスルターンが、このような他のアミールたちの既得権益を根本的に禁止・制約することは事実上不可能であり、歴代スルターンの財政再建や国家体制を再構築するための努力も、必然的に対症療法的にならざるを得ず、次第に行き詰まっていった<sup>137)</sup>。スルターンは目前の危機を乗り切るため、自身の直轄財政の拡大に力を入れ、それによって地位の安定化を図るとともに、破綻に瀕した国家財政を支えることを試みた。こうして国家財産のスルターン財源への転用という形で、国有地の流出はスルターン自身によっても促進されたのである。そして最終的には、農地や都市や商業活動に関わる様々な利権を集積して巨大化したザヒーラが、機能不全に陥った国家の行財政を支える上で不可欠な存在となった。かかるスルターン財政の発展は、有力者による私的権益の集積と国家制度を通じた統治体制の弱体化の一プロセスであると同時に、それが進行する中での体制維持のあり方であったと位置付けられよう。

また、ザヒーラを軸として展開された、スルターンによる農地の獲得・保有のあり方は、この時代の土地制度の変容を具に反映していた。すなわち、バフリー末期から続く継続的な国有地の流出により、9/15世紀にはイクターや政府直轄地以外に、私有地、ワクフ、賃借地、ヒマヤ等、土地の保有形態が多様化していた。当初ザヒーラの土地は「賃借」という形態でスルターンの管理下に移動した国有地を意味したが、このような様々な形態によって国家のコントロールを離れた土地権益が社会に広く拡散していく中で、スルターンのもとに集められた土地の形態もまた多様化した。スルターンがイクターであれワクフであれそれらの土地をそのままの形態で自身のもとに集積させたことは、国家による土地の一元的掌握の崩壊と保有形態の多様化

／ ついては：Sulūk, 4: 1139; Ibn Taghribirdī, Nujūm, 15: 321-322; al-Ṣayrafī, Nuzha, 4: 109.

137) Cf. 五十嵐 2006: 60-61; id. 2004a: 23-25.

により、土地に対する権利（＝租税徴収権）が錯綜・重層化する中で、それを整理・再構築することが最早不可能となっていたことを意味していた。そしてこのようなスルターン直轄財源のあり方は、規模はともかく本質的にはアミール層を初めとする有力者たちの財源確保の手法と大きな違いはなく、彼らもまたイクターのほか賃借、保護、私有地の獲得とワクフ設定、さらには様々なワクフ管財人職の掌握等、様々な形で土地権益を集積していた<sup>138)</sup>。その意味で、スルターンの直轄財源の拡大はその他の有力者たちの私的権益の拡張と同列に位置付けられ、いずれも土地権益の社会的拡散という当時の全般的状況の上に成り立っていたのである。そしてスルターンがこれらの権益を自己のもとに集積することは、他の有力者たちが獲得する分を抑制することにもつながり、その逆もまた然りであった。個々のスルターンの権力基盤や政治力の強弱により、それが強ければこれらの多くの権益を一手に集めることが可能な反面、弱ければそれは制限され、また忠誠を獲得するために分け与える必要があった。すなわち国家制度を通じた配分システムから離れた諸権益をいかに自己のもとに集積できるかは、支配エリート内部のパワー・バランスに左右されたのである。それ故、スルターンが集積した権益は、その交代によって一度放出され、多くが他の有力者の手に移ることになったのである。

さて、マムルーク朝の国家・社会構造の基底であったイクター制が、土地徴収権の配分を国家がコントロールすることによって成り立っていたことを想起すれば、このように土地に対する権益が多数、国家の直接の管理下から離れ、社会全般に広く拡散したことは、スルターンを頂点としたマムルーク・軍人支配層内部の政治・権力構造はもとより、イクター保有を通じ農村の富を都市に環流させる

力を独占的に握ることによって成り立っていた彼らの権力と支配のあり方に大きな影響を与えたことは疑いない。それについては、土地制度の変容と支配層との関わりを考察する予定の別稿で改めて論じたい。

## 1. 史料

### (1) 文書史料

Waqf deeds:

Sultan al-Zāhir Barqūq: Cairo, Dār al-Wathā'iq al-Qawmiya (DW), 9/51; Wizārat al-Awqāf (WA), j51, j67, j562, j704, j728, j736.

Sultan al-Mu'ayyad Shaykh: WA, q938; Fahmī 'Abd al-'Alim (ed.), in his *al-'Imāra al-Islāmiya fi 'Aṣr al-Mamālik al-Ĵarākisa: 'Aṣr al-Sulṭān al-Mu'ayyad Shaykh*, Cairo, 2003: 113-169.

Sultan al-Ashraf Barsbāy: Aḥmad Darrāj (ed.), *Hujjat Waqf al-Ashraf Barsbāy*, Cairo, 1963.

### (2) 叙述史料

'Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī, *Nayl al-Amal fi Dhayl al-Duwal*. 'Umar 'Abd al-Salām al-Tadmuri (ed.), 9 vols., Sidon and Beirut, 2002.

———, *Al-Rawḍ al-Bāsim fi Hawādiṭh al-'Umr wa-al-Tarājim*. Vatican, Biblioteca Apostolica Vaticana, MS Vaticano Arabo 729; Cairo, Ma'had al-Makḥṭūṭāt al-'Arabiya, MS Ta'riḥh 2281, 2282, 2283.

al-Asadī, *Al-Taysir wa-al-'Itibār wa-al-Tahrir wa-al-Ikhtibār fīmā yajib min Ḥusn al-Tadbir wa-al-Taṣarruf wa-al-Ikhtiyār*. 'Abd al-Qādir Aḥmad Ṭulaymāt (ed.), Cairo, 1968.

al-'Aynī, *Iqd al-Ĵumān fi Ta'riḥh Ahl al-Zamān*. (1): 'Abd al-Rāziq al-Taṅṭāwī al-Qarmūṭ (ed.), Cairo, 1985./ (2): idem (ed.), Cairo, 1989./ (3): Imān 'Umar Shukrī (ed.) (entitled as *Al-Sulṭān Barqūq: Mu'assis Dawlat al-Mamālik al-Ĵarākisa 784-801 A.H./1382-1398 A.D.*), Cairo, 2002.

al-Biqā'ī, *Ighār al-'Aṣr li-Asrār Ahl al-'Aṣr*. Muḥammad Sālim b. Shadīd al-'Awdī (ed.), 3 vols., Riyad, 1992-93.

anon. *Dīwān al-Inshā'*. Paris, Bibliothèque Nationale, MS Arabe 4439 (known as al-Khālidi's al-Maqṣad al-Rafī').

al-Firūzābādī, *Al-Qāmūs al-Muḥīt*. 4 vols., Cairo, 1306 A. H.

Ibn al-Furāt, *Ta'riḥh al-Duwal wa-al-Mulūk*.

138) それとともに、ここでは詳述する余裕はないが、彼らもスルターンと同様、特定の商店を保護下に置いたり、穀物投機を行うなど、商業活動へも積極的に介入していた。

- Quṣṭanṭīn Zurayq (ed.), vols. 7-9, Beirut, 1936-42.
- Ibn Ḥajar al-ʿAsqalānī, *Dhayl al-Durar al-Kāmina*. ʿAdnān Darwish (ed.), Cairo, 1992.
- , *Inbāʾ al-Ghumr bi-Abnāʾ al-ʿUmr*. Ḥasan Ḥabashī (ed.), 4 vols., Cairo, 1969-98.
- Ibn Hījī, *Taʾriḫ Ibn Hījī*. Abū Yahyā ʿAbd Allāh al-Kundurī (ed.), 2 vols., Beirut, 2003.
- Ibn al-Himsī, *Ḥawādīth al-Zamān wa Wafayāt al-Shuyūkh wa-al-Aqrān*. ʿUmar ʿAbd al-Salām Tadmurī (ed.), 3 vols., Beirut, 1999.
- Ibn Iyās, *Badāʾiʾ al-Zuhūr fī Waqāʾiʾ al-Duhūr*. Muḥammad Muṣṭafā (ed.), 5 vols., Wiesbaden, 1960-75.
- Ibn al-Jīʿān (Sharaf al-Dīn Yahyā), *Kitāb al-Tuḥfa al-Saniya bi-Asmāʾ al-Bilād al-Miṣriya*. Cairo, 1898.
- Ibn al-Jīʿān (Badr al-Dīn Muḥammad), *Al-Qawāl al-Mustazraf fī Safr Mawlā-nā al-Malik al-Ashraf*. ʿUmar ʿAbd al-Salām Tadmurī (ed.), Ṭarābulus, 1984.
- Ibn Manzūr, *Lisān al-ʿArab*. 15 vols., Beirut, n.d.
- Ibn Qāḍī Shuhba, *Taʾriḫ Ibn Qāḍī Shuhba*. ʿAdnān Darwish (ed.), 4 vols., Damascus, 1977-97.
- Ibn al-Shihna, *Al-Badr al-Zāhir fī Nuṣrat al-Malik al-Nāṣir Muḥammad b. Qāyṭbāy*. ʿUmar ʿAbd al-Salām Tadmurī (ed.), Beirut, 1983.
- Ibn Taghrībirdī, *Ḥawādīth al-Duhūr fī madā al-Ayyām wal-Shuhūr*. (1):William Popper (ed.), 4 vols., Berkeley, 1930-42./ (2): Fahīm Muḥammad Shaltūt (ed.), vol. 1, Cairo, 1990.
- , *Al-Manhal al-Ṣāfi wa-al-Mustawfi baʿda al-Wāfi*. Muḥammad Muḥammad Amīn (ed.), vols. 1-12, Cairo, 1985-2006.
- , *Al-Nujūm al-Zāhira fī Mulūk Miṣr wa-al-Qāhira*. Fahīm Muḥammad Shaltūt et al. (eds.), 16 vols., Cairo, 1963-72.
- al-Maqrīzī, *Kitāb al-Sulūk li-Maʿrifat Duwal al-Mulūk*, vols. 1-2, Muḥammad Muṣṭafā Ziyāda (ed.), Cairo, 1939-58, vols. 3-4, Saʿīd ʿAbd al-Fattāḥ ʿĀshūr (ed.), Cairo, 1970-73.
- , *Al-Mawāʾiẓ wa-al-Iʿtibār fī Dhikr al-Khiṭaṭ wa-al-Āthār*. Ayman Fuʿād Sayyid (ed.), 5 vols., London, 2002-04.
- al-Qalqashandī, *Ṣubḥ al-Aʾshā fī Ṣināʾat al-Inshāʾ*. 14 vols., Cairo, 1913-22; repr. 1985.
- al-Ṣafaḍī, *Aʾyān al-ʿAṣr wa Aʾwān al-Naṣr*. ʿAlī Abū Zayd et al. (eds.), 6 vols., Damascus and Beirut, 1998.
- al-Sakhāwī, *Al-Dawʾ al-Lāmiʾ li-Ahl al-Qarn al-Tāsiʾ*. 12 vols., Cairo, 1934-37.
- , *Al-Tibr al-Masbūk fī Dhayl al-Sulūk*. Cairo, n.d.
- , *Wajiz al-Kalām fī al-Dhayl ʿalā Duwal al-Islām*. Bashshār ʿAwwād Maʿrūf et al. (eds.), 4 vols., Beirut, 1995.
- al-Ṣayrafī, *Inbāʾ al-Ḥaṣr bi-Abnāʾ al-ʿAṣr*. Ḥasan Ḥabashī (ed.), Cairo, 1970.
- , *Nuzhat al-Nufūs wa-al-Abdān fī Tawāriḫ al-Zamān*. Ḥasan Ḥabashī (ed.), 4 vols., Cairo, 1970-94.
- anon. *Taʾriḫ al-Malik al-Ashraf Qāyṭbāy*. London, British Library, MS Or 3028.
- al-ʿUmarī, *Masālik al-Aḥsār fī Mamālik al-Amṣār*. Ayman Fuʿād Sayyid (ed.), Cairo, 1985.
- al-Zāhirī, *Kitāb Ḍubdat Kashf al-Mamālik*. Paul Ravaisse (ed.), Paris, 1894; repr. Cairo, 1988.

## 2. 二次文献

- ʿAbd al-Nabī, Najlā Muḥammad 2001. *Miṣr wa-al-Bunduqīya: al-ʿAlāqāt al-Siyāsiya wa-al-Iqtisādiya fī ʿAṣr al-Mamālik*. Cairo.
- Abū Ghāzī, ʿImād Badr al-Dīn 2000. *Taṭawwūr al-Hiyāza al-Zirāʿiya Zaman al-Mamālik al-Jarākisa: Dirāsa fī Bayʿ Amlāk Bayt al-Māl*. Cairo.
- Aḥmad, Aḥmad ʿAbd al-Razzāq 1979. *Al-Badhī wa-al-Barṭala Zaman Salāṭīn al-Mamālik: Dirāsa ʿan al-Riḥwa*. Cairo.
- Amīn, Muḥammad Muḥammad 1980. *Al-Awqāf wa-al-Ḥayāt al-Ijtīmāʿiya fī Miṣr 648-923 A.H./1250-1517 A.D.*, Cairo.
- Ashtor, Eliyahu 1974-79. “Le monopole de Barsbay d’après des sources vénitienes.” *Anuario de Estudios Medievales* 9: 551-572.
- , 1983. *Levant Trade in the Later Middle Ages*. Princeton.
- Ayalon, David 1958. “The System of Payment in Mamluk Military Society.” *Journal of the Economics and Social History of the Orient (JESHO)* 1 (1): 37-65; (3): 257-296.
- Berkey, Jonathan 2004. “The Muḥtasibs of Cairo under the Mamluks: Toward an Understanding of an Islamic Institution.” *The Mamluks in Egyptian and Syrian Politics and Society* (M. Winter and A. Levanoni, eds.), 245-276, Leiden and Boston.
- Darrag, Aḥmad 1961. *L’Égypte sous le règne de Barsbāy*. Damascus.
- Ernst, Hans 1960. *Die mamlukischen Sultansurkunden des Sinai-Klosters*. Wiesbaden.
- Ferrand, Gabriel 1920. “Les Pouds, Mesures et Monnaies des du Sud aux XV<sup>e</sup> et XVII<sup>e</sup> siècle.” *Journal Asiatique (JA)*, série 11, tome 16: 5-150, 193-312.
- Garcin, Jean-Claude and Mustapha Anouar Taher 1995. “Enquete sur le financement d’un

- waqf égyptien du XVe siècle: les comptes de Jawhar al-Lälä.” *JESHO* 38 (3): 262-304.
- Horii, Yutaka 2003. “The Mamlük Sultan Qānšūh al-Ghawri (1501-16) and the Venetians in Alexandria.” *Orient* 38: 178-199.
- Ito, Takao 2003. “Aufsicht und Verwaltung der Stiftungen im mamlukischen Ägypten.” *Der Islam* 80: 46-66.
- Lane, E. W. 1863-93. *An Arabic-English Lexicon*. 8 vols., London and Edinburgh (repr. Beirut, 1997).
- Lev, Yaacov 2005. *Charity, Endowments, and Charitable Institutions in Medieval Islam*. Gainesville.
- Little, Donald P. 1998. “Notes on the Early *Naẓār al-Khāṣṣ*.” *The Mamluks in Egyptian Politics and Society* (T. Philipp and U. Haarmann, eds.), 235-253, Cambridge.
- Martel-Thoumian, Bernadette 1992. *Les civils et l'administration dans l'État militaire mamlük (IXe/XVe siècle)*. Damascus.
- , 2005. “The Sale of Office and Its Economic Consequences during the Rule of the Last Circassians (872-922/1468-1516).” *Mamlük Studies Review (MSR)* 9 (2): 49-83.
- Meloy, John L. 2003. “Imperial Strategy and Political Exigency: The Red Sea Spice Trade and the Mamluk Sultanate in the Fifteenth Century.” *Journal of the American Oriental Society* 123 (1): 1-19.
- , 2004. “The Privatization of Protection: Extortion and The State in the Circassian Mamluk Period.” *JESHO* 47 (2): 195-212.
- , 2005. “Economic Intervention and the Political Economy of the Mamluk State under al-Ashraf Barsbāy.” *MSR* 9 (2): 85-103.
- Miura, Toru 1997. “Administrative Networks in the Mamlük Period: Taxation, Legal Execution, and Bribery.” *Islamic Urbanism in Human History: Political Power and Social Networks* (Sato Tsugitaka, ed.), 39-75, London and New York.
- , 2006. “Urban Society in Damascus as the Mamluk Era was Ending.” *MSR* 10 (1): 157-193.
- Mortel, Richard T. 1995. “The Decline of Mamlük Civil Bureaucracy in the Fifteenth Century: The Career of Abū l-Khayr al-Naḥḥās.” *Journal of Islamic Studies* 6 (2): 173-188.
- Nāṣir, ‘Amir Najīb Mūsā 2003. *Al-Hayāt al-Iqtisādīya fī Miṣr fī al-‘Aṣr al-Mamlūkī*. Amman.
- Petry, Carl F. 1994a. *Protectors or Praetorians?: The Last Mamlük Sultans and Egypt's Waning as a Great Power*. Albany.
- , 1994b. “From Slaves to Benefactors: The Ḥabashīs of Mamlük Cairo,” *Sudanic Africa* 5: 57-66.
- , 2000. “Waqf as an Instrument of Investment in the Mamluk Sultanate: Security vs. Profit?” *Slave Elites in the Middle East and Africa: A Comparative Study* (Miura Toru and John E. Philipps, eds.), 99-115, London and New York.
- Poliak, A. N. 1939. *Feudalism in Egypt, Syria, Palestine, and the Lebanon, 1250-1900*, London (repr. Philadelphia, 1977).
- Popper, William 1955-57. *Egypt and Syria under the Circassian Sultans 1382-1468: Systematic Notes to Ibn Taghri Birdi's Chronicles of Egypt*. 2 vols., Berkeley and Los Angeles.
- Rabie, Hassanein 1972. *The Financial System of Egypt A.H. 564-741/A.D. 1169-1341*, London.
- Reinaud, M. 1829. “Traité de commerce entre la république de Venise et les derniers sultans mameloucs d'Égypte, traduits de l'italien, et accompagnés d'éclaircissements.” *JJA* 4 (19): 22-51.
- Sabra, Adam 2000. *Poverty and Charity in Medieval Islam: Mamluk Egypt, 1250-1517*. Cambridge.
- , 2004. “The Rise of a New Class? Land Tenure in Fifteenth-Century Egypt: A Review Article.” *MSR* 8 (2): 203-210.
- Sato, Tsugitaka 1997. *State and Rulal Society in Medieval Islam: Sultans, Muqta's and Fallahun*, Leiden.
- Wansbrough, John. 1961. “A Mamluk Letter of 877/1473.” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies (BSOAS)* 24: 200-213.
- , 1963. “A Mamluk Ambassador to Venice in 913/1507.” *BSOAS* 26: 503-530.
- Ziadeh, Nicola A. 1953. *Urban Life in Syria under the Early Mamlüks*. Beirut.
- 五十嵐大介 1999 「マムルーク朝末期のシリア統治政策：財政政策とシリアの支配層の動向を中心に」『東洋学報』80 (4) : 030-058.
- , 2003 「バラートゥススィーの『国庫論』」『中央大学アジア史研究』27 : 1-23.
- , 2004a 「後期マムルーク朝におけるムフラド庁の設立と展開：制度的変化から見るマムルーク体制の変容」『史学雑誌』113 (11) : 1-36.
- , 2004b 「後期マムルーク朝スルターンの私財とワクフ：バルクークの事例」『オリエン』47 (2) : 20-45.
- , 2006 「後期マムルーク朝国家と土地制度：イクター制崩壊期の東アラブ世界」博士論文（中央大学）.
- , 2007a 「『国有地ワクフ』をめぐるイスラーム法上の議論：12～16世紀」『東洋学

- 報』88 (4) : 021-048.
- , 2007b 「マムルーク朝末期の財務行政：国家財政とスルターン財政」『人文研紀要』(中央大学) 61 (印刷中)
- 川本正知 1991 「イスラムの私有財産 (milk) について」『オリエント』34 (1) : 65-78.
- 菊池忠純 1997 「我が父ハリール・ブヌ・シャーヒーン：‘Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī の記述の比較研究」『西南アジア研究』47 : 53-73.
- 古林清一 1968 「マムルーク朝の商業政策」『史林』51 (6) : 36-61.
- 佐藤圭四郎 1981 『イスラーム商業史の研究：増東西交渉史』同朋舎.
- 三浦 徹 1989 「マムルーク朝末期の都市社会：ダマスカスを中心に」『史学雑誌』98 (1) : 1-47.

原稿受領日—2006年11月15日

掲載決定日—2007年4月12日